

# 日本文化協会報

(第十号) 記念特輯

発行所  
日本ビルマ文化協会  
大阪市南区長堀橋筋2-28  
電 06-213-5858  
発行兼編集人  
保科賢一

特別頒布  
ビルマ地図 (250円)  
ビルマ語会話集 (300円)  
〒55円  
申込先  
大阪市南区長堀橋筋2-28  
日本ビルマ文化協会  
振替口座 大阪310039  
取引銀行 日本一支部

## ビルマ式社会主義

開国と自力開発の段階に

高橋保

ビルマでは、本年三月、十二年にわたった軍政に終止符をうち、新憲法のもと文民政府による新しいスタートが切られた。国名も従来のビルマ連邦からビルマ連邦社会主義共和国と改称されている。このたびの民政移管は、実質的には従来のネ・ウイン軍事政策の延長にすぎないとみられる面が多いが、それにしてもこれを機に、鎖国・中立と経済国有化を中心に推進してきたネ・ウイン政権のビルマ社会主義建設が新段階に入ったことは確かなのである。

### 仏教思想強く影響

一体、ネ・ウイン政権が達成しようとしているビルマ社会主義とはどのようなものであろうか。それについては、クーデターによるウー・ヌー政権打倒後、革命評

議会や唯一の合法政党たる社会主義計画党などから発表されたイデオロギー文献によってうかがうことができる。それによると、ビルマ社会主義は農民と労働者を基礎に公正が支配する豊かな社会主義社会を建設する民族的社會主義であるが、それは資本主義体制を否定し、同時にまた共産主義体制とも異なるものであり、結局これら両者の中間に位置する社会主義体制であるということになる。そしてその政治理念において最も特徴的なことは、全人口の八五%が仏教徒という現地ビルマ社会の伝統的価値体系として重要な小乗仏教思想からの強い影響が看取されることである。社会主義計画党のイデオロギー文献にみられる世界観はパリー語を用いた仏教的世界観そのものであり、物質と精神の相

互関係およびそれら一切が有為転変して行くする考え方には仏教の縁起観の投影がみられる。また人間の存在を重視し、誠実・友愛・寛容を高く価値づけ、国民的道德の高揚・精神的幸福の達成を重視しているのも、同じく仏教の考えに基づいている。このようにみてくると、ビルマ社会主義の政治理念は、西欧的社會主義思想とビルマの伝統の調和に基づく独自の社会主義社会の実現を目指すものであることが明らかとなろう。

### 政権の性格で差異

ところで、こうした現地社会の伝統的仏教に根ざしたビルマ社会主義の実現については、独立後のビルマの歴史政権が一貫して主張してきたところであるが、このうち政治と仏教の関係について、その濃淡・比重のおき方には、各政権の性格によってかなり差異があった。すなわち、独立直前のオン・サン政権時代のビルマは世俗国家を志向し非宗教的の性格が強かった。しかし独立達成（一九四八年）以後は、国家が仏教を重視すべきで、それを保護育成する義務さえ

もつものたどの国民大衆の心情を實際政治面にも反映させるべきだと考へる政治家が多くなつた。その代表的存在がウー・ヌーであり、彼の仏教社会主義の主張であつた。こうした政治面での仏教重視の傾向が生まれたについては、独立以前のビルマのナショナリズム運動において有力な思想的武器であつたマルクス・レーニン主義は、独立後は共産主義者が反政府勢力となり、その思想は国家破壊の政治思想とみなされて排除され、したがつて政権担当者側の政治思想には伝統的価値との調和が強く望まれたという時代の背景があつたのである。

さて、ウー・ヌーの仏教社会主義には、西欧的社會主義の目指す社会階級の平等化のほかに、特色ある考え方として、人間の苦の次元を経済的レベルの処理によって解決されるものとせず、財産などの所有欲の否定による解決が説かれた。彼は仏教僧侶組織（サンガ）を平等と平和実現の理想社会のモデルと考えていたのである。彼の仏教社会主義の究極目標は人間の精神的内面的安定にあり、政治的安定や経済的繁栄は宗教的目的に従属するものとみなされた。ここに現実社会の一般大衆とはかなりずれた点がみられるのである。またウー・ヌーの社会主義は政治政策面では仏教的寛容に基づく融和政策となり、優柔不断のそしりを免れなかつた。

事実、仏教国教化をめぐるサン

ガの過激な要求と、一方少数民族を中心とする非仏教徒側からの反発の中で、ウー・ヌー政権下のビルマは国家分解の危機に瀕（ひん）し、これが六二年三月のネ・ウイン將軍を中心とする軍部のクーデターへとつながつたのである。ネ・ウイン新政権は、ウー・ヌー政権のとつた宗教政策によって生じた非合理性を排除する政策を打ち出し、仏教国教化を否定した。ネ・ウインは先述したように仏教思想をその政治理念の中に採用しつつも、国家建設においては、再びオン・サン時代と同様の世俗国家を志向し、宗教問題はあくまで個人的問題であるとの立場に立っている。

これに関連して、ウー・ヌー時代には独特の仏教的寛容の徳目に支えられて政党活動の自由をふくむ議会制民主主義が展開していたが、ネ・ウイン政権ではこの議会制民主主義はいたずらに国政を混乱させ、国内分裂を促進するものとして否定され、強力な統制力ある一党制の導入が図られている。この点においても、ネ・ウインはオン・サン路線を引きついでいるといえる。

### 急激な国有化政策

このほか、たとえば経済政策については、ネ・ウイン政権のとつた外国資本化追放による急激な経済のビルマ人政策などは、オン・サンの遺志を最も徹底した形で受け継いだものとみられる。しかし、あまりに急激なネ・ウイン政権の

国有化政策は、経済のビルマ人化には成功したが、その半面、とくに流通機構を混乱させる結果となり、農・工業生産の停滞から物資不足、輸出減少、インフレの高進となり、国民経済の混乱を招来したことは否定できない。

しかし、ネ・ウイン政権はビルマ社会主義確立のために国民生活の多少の犠牲は覚悟しなければならぬとの決意の上にならぬ、国民に耐乏を要請し、一般国民もこれに對してよくこたえ、少なくとも大きな反政府活動は発生しなかつた。これには多分に、本来自給自足の性格が強く、たとえ輸入品がなくても日常生活にはほとんど困らないといったビルマの農村生活の豊かさに負うところも大きい。また物欲の極少化を善しとする仏教的価値観に支えられた面も見逃せないのではなからうか。

ネ・ウイン政権はそうしたビルマの現実をよく認識し、ビルマ経済が耐えられるかぎりの最低線まで下りて、将来の自立経済発展のために不可避な徹底した経済改革を推進しようとしたものでないかと思われ。この点、外国資本の導入による急速な経済開発への道をとった隣国タイの場合と、開発速度は緩慢でも何よりも自力による開発を重視するビルマの場合とは、著しくその立場が異なるといえよう。

成否、予断許さぬ

以上のように、ネ・ウインはウー・スー議会議会政治の反省の上に、

ビルマ独立の父であり、かつての尊敬する同志で、不幸、独立直前に暗殺されたオン・サン將軍の遺志を受け継いでビルマ独自の社会主義建設の道を進みつつあるのである。

これまで十二年間にわたるネ・ウイン政権の施政の評価については、種々意見の分かれるところであるが、筆者としては、クーデター直後に同政権が掲げた基本目標としての国民的統一の保持と経済の自国人化を一応達成したとみられる点で、これを高く評価したいと思う、ネ・ウイン政権がみずから民政移管に踏み切ったのも、またそのことに成功したとの自信の故にほかならぬまい。

従来、東南アジアではビルマ以外でもインド、インドネシア、カンボジア、スリランカなどをはじめ各国固有の伝統的価値を基礎に新しい社会主義の模索が多く試みられたが、その大部分は理念段階を出ず、しかもそれすら失敗に終わったとみられるものが多い。こうした中において、開国と開発を中心に、いよいよ本格的なビルマ社会主義実践の第二段階に入ったネ・ウイン政権の今後の動向はとくに注目に値するが、この試みの最終的成否についてはなお予断を許さぬと思われる面が多い。(筆者はアジア経済研究所主任調査研究員。朝日新聞)

× × × × ×  
× × × × ×  
× × × × ×  
× × × × ×



駐ビルマ大使に

有田武夫氏発令さる

政府は七月十六日の閣議で、駐ビルマ大使にOECD代表特別全権公使の有田武夫氏を任命する事に決定、同日付で発令しました。(註)OECDとは経済協力開発機構の略。事務局はパリにある。

同氏の略歴、旧丸亀中学、旧三年、東大法卒。在学中行政科試験合格。外務省入り、経済協力課長、条約局兼経済協力局参事官、駐インドネシア公使を経て四十六年よりOECD公使。大正九年生れ。東京都出身。

新大使は自分は経済協力屋だと自称されると共に、発展途上国との文化交流にも深い関心を示されているので、爾後の物心両面に亘るビルマ国への協力に對し、大にその御手腕が期待されています。尚ほ今般、同大使は、当協会の名誉顧問に就任する事を承諾されました。(保科記)

寄付者御芳名

一五、〇〇〇円 梅原 保氏

- 三、〇〇〇円 本台 葉子氏
- 二、〇〇〇円 小林 秀樹氏
- 一、〇〇〇円 種谷 力氏
- 一、五〇〇円 氏家 作治氏
- 二十円 本藤 千幸氏
- 二、〇〇〇円 王子田孝志氏
- 五、〇〇〇円 保科 賢一氏

右、御寄付賜った方々に、誌上を通じ厚く御礼申し上げます。(総務部)

会員諸氏にお願い

御承知の如く、毎年八月末日が会費納入期限になっていきますので、昭和四十九年度以前の会費を未だ納入されていない会員の方は、一刻も早く納入賜わる様お願いします。

大阪市南区長堀橋筋 二一八

日本ビルマ文化協会 電〇六一二一三一

郵便振替口座 五八五八

大阪 三一〇〇三九

振込銀行口座 三和銀行日本一支店

普通口座 普通口座

ビルマ戦跡巡拝慰霊

お知らせ

昭和五十年三月五日より約

一週間の予定にてビルマ国へ戦跡巡拝慰霊の旅を行いますので参加御希望の方は左記へ御連絡下さい。

連絡先 東京都杉並区和田一丁目

- 五三―三―三二八 高野恒一(協会員)
- 電〇三―三―八一 四八八三 (総務部)

常務理事会審議事項報告

去る四十九年七月六日京都に於て開催した常務理事会の審議の結果を左の通り報告致します。

- (一) 社団法人格取得の件、
- (二) 先の総会で法人格取得の為の専門委員会が編成され準備に關し一任されているので同委員会に於て速かに作業を進めることを確認。
- (三) 申請の時期、特に本年度通常総会との関係等について尚検討するが基本方針として速かに認可を得る事を第一目標とし、為し得れば来る通常総会で申請終了の事後承認をとりつけ得る様努力する。
- (四) 本年度通常総会の件 略
- (五) 役員改選の件

本件に關しては社団法人格の取得の時期が比較的早目に予測されるので改選後短時間で法人役員に切換えられる公算大である為、出来るだけ現在の役員が留任する形が望ましいので、役員

選考委員を内定しその方針を説明善処してもらおう。

大阪外大支部の取扱に関する件  
大外大在学の学生(三十三名)諸君により当協会外大支部が結成され、事業計画、予算等が本部に提出される予定で、本部は之を検討して協力、援助を強力に進める。

学生の年度会費は正会員の三分の一とし正会員として取扱う。  
希望在日ビルマ人が当協会に入会を希望する人は凡て特別会員として取扱う。(但し在日中)、従って年度会費は納入を要せず、又協会バッジは之を贈呈する。  
又協会の他 略

理事会審議事項報告

一、日時 昭和四十九年八月三日 午後一時  
二、場所 株式会社ワコール本社 会議室  
三、審議事項

(1) 法人格取得に關し、七月六日開催した常務理事会決定事項に付き、更に細部を検討し、来る九月二十九日、東京九段会館に於て協会の通常總會を開催し、所定の審議事項の承認を得た後、閉会後更に法人設立總會を同日開催、承認を受ける事を議決した。

(2) 法人設立に必要な書類、特に定款に關し、要点に付き審議の結果、引続き法人設立の爲の準備専門委員会に一任する事を議決した。  
(3) 社団法人設立代表に塚本会長を推薦を議決した。

一、塚本会長より就任挨拶をかね協会に対する意見開陳あり。理事各位からも自由な意見発表があった。

一、当日出席者

塚本幸一、酒井栄一郎、小谷隆英、甲谷秀太郎、矢野静一、浅井時二郎、長谷川元信、加護野忠太郎、桑原真一、相馬猛、保科賢一、内田健、坪田祐三、山田親英、塔本成幸、中村源三。  
以上一六名、他に委任状一八通。  
ワコール社長室、中村室長も同席 (総務部塔本記)

上田天瑞師遷化

協会員、上田天瑞師(真言宗大僧正、元高野山大学学長)は八月廿七日脳溢血のため、自坊の成福院(高野山)にて遷化されました。

茲に謹んで同氏の訃報をお知らせすると共に、同氏が生前、ビルマ戦没者の慰霊、供養に献身された御尽力御努力に対し深甚の謝意を表し、心から御冥福をお祈りする次第です。尚ほ葬儀には、協会を代表して酒井、小谷両副会長が列席しました。  
九月一日 会長 塚本幸一

同氏は昭和十六年、高野山大学より南方仏教修学のため、泰國へ派遣されましたが大戦勃発と共に陸軍嘱託として単身ビルマ国へ入り、凄惨なる戦争体験をつぶさにされ、後ビルマ僧となって修業さ

れたのである。(僧名ウ・ワデラプデー)

ビルマに武士道を残す

山田長政の残党

鈴木 孝

完成されました。  
此の塔には、本尊ビルマ仏、英霊と共に不動明王と摩尼宝珠をおまつりし、滅罪供養と繁栄祈願のため、同師は他界直前まで厳寒酷暑をいとわず自ら毎朝護摩供養をされてきたのであります。  
右謹んで御報告致します。(保科記)

山田長政。彼は徳川時代の初期、沼津藩主大久保侯の駕籠(かご)かぎに過ぎなかつたが、青雲の志(や)みがたく、御朱印船につてを求めて日本をあとにし、今のタイ、當時のシャムに渡り、そこに栄えていたアユチャ王国で武功を樹(た)てて以来、榮進して大名に封ぜられるが、彼を重用した国王の死後、王位争いに巻き込まれ、王位をねらった宰相の奸計(かんけい)で毒殺される。このあと長政を頭領と仰いだ日本人町の武士たちは宰相一派に戦いを挑まれ、長政の弔い合戦とばかり奮戦するが衆寡敵せず、生き残った

者は東隣のカンボジアへ逃げ、そこでごとく死に絶える、日本人町は焼き払われる、というのが、わが歴史の通説になつていようだが、私は前任地のビルマで、この通説に反し長政の残党の

武士六十二人がアユチャを脱出し、メナム河沿いに北へ向かい、今のビルマのケンントン州(中国、ラオス、タイに国境を接する高原地帯)に亡命、そこにこのゴン・シャ族(タイ族と同一種族)の大名に庇護(ひご)されて余生を全うした事実を知った。

ただこれだけのことなら、それほどこのニュース価値はないといえるが、これらの亡命武士が大名一族に与えた感化はすこぶる大きく、それが現在に及んでいることを私は知って深い興味を覚えたのである。  
私はこの話をしたのは、他ならぬこのゴン・シャ族大名の直系の子孫のサオ・ヨウ・モン氏夫妻で現在ケンントン州でビルマ共産党ゲリラに対するビルマ国防軍の追撃戦が行われていることもあって夫妻は一族とともにラングーン

に仮住居しているのだが、ある日私を訪ねてきて次のように語った。

「私も先祖からの代々の言い伝えですが、タイのアユチャ王国時代に日本の武士六十二人がシャム人にさらわれたとかで私も先祖の領内に逃げてきたので、先祖たちは彼らをかきました。ジャップンと呼ばれたこれらの武士は一人のリーダーに率いられた太平洋のある島からシャムに渡ってきたものだそうですが、彼らは私ども先祖の好意に酬(む)いるために国を豊かに強くする方法を色々教えたそうです。これらの武士は皆立派な人だったので、私どもの先祖たちはいつの間にか彼らの習慣を真似るようになり、例えば男はそれまでの習慣の長髪をやめてイガグリ頭となり、衣服は袴(えり)を左前に合わせて着る、肉親の葬式には白い喪服を着用する、指で食事する習慣をやめて箸(はし)を使う、人にあいさつするときには丁寧に頭を下げる、ということから、女は男を差しおいて前にシャマリ出ではならない、若い者は年寄りをいたわらねばならぬ、人のつき合ひには信義を守らなければいけない、などのジャップンの道徳も学びました。これらの道徳は今でも私ども一門の守るべき掟(おきて)になつています。ジャップンたちは自身者ばかりだったそうで、やがて私ども先祖の娘たちと結婚して家庭を持ちました。それ故私ども夫婦は日本人の血を引いているわけです。私もはこれを誇り

にしています。

こう語ったサオ・ヨウ・モン氏  
夫妻の容貌(ようぼう)といい、  
態度といい、今日の日本人以上の  
日本人という感じがした。いへら  
か古風だが誠実で明るい印象を与  
えた。

さてここで、夫妻の言ったいく  
つかの言葉を私なりに推理してみ  
ると、「ジップン」というのは日  
本人であることは明らかである。  
恐らくこれらの武士たちが自分た  
ちのことを「ニッポン」人と称し  
たの聞いて訛(なま)ったものだ  
らう。次に六十二人という人数で  
あるが、G・D・E・HALLと  
いう英国人が書いた東南アジア史  
に「十七世紀」の初頭、タイ国王  
は七十人の日本の武士を傭兵(よ  
うへい)として抱えていた」との  
記述があるのを発見したので、あ  
るいはこれに対応するものかも知  
れない。しかし真相はわからな  
い。「一人のリーダー」というの  
は恐らく山田長政で「太平洋のあ  
る島」というのは、長政は日本を  
出奔してから当時「タカサゲン」  
と呼ばれた台湾に渡ったが、余り  
思わしくなかったため、ここから  
シャムに渡ったと言われているの  
で「ある島」は台湾を指したので  
はないかと思われる。

最後に「イガグリ頭」だが、私  
はそのころの日本人はすべてチ  
ンマゲとばかり思っていたから「  
イガグリ頭」は腑(ふ)に落ちな  
かったが、ある日本史探訪の本の  
口絵にタイ国立博物館所蔵という  
長政当時の日本人傭兵団を描いた

面の写真が載っているのを見つけ  
たので、これをよく見たらどれも  
着物を左前に着たイガグリ頭であ  
った。夫妻の話は真実を語ってい  
たわけである。これは察するところ  
、タイは大変暑い暑い所だし、  
それに傭兵という職業はいつでも  
出勤を必要とするところから、う  
つとうして結髪にヒマのかかる

### 「ビルマ語懺悔」(二)

服部 正 一

パコックの町からずつと西へ平  
原を横ぎるとティリンという町  
があって、そこからなおジャング  
ルと山を越えたところの高原地帯  
にアインマという部落がある。そ  
この住民の大部分がタウンダー族  
で、少教のビルマ人が混って生活  
していた。人々は親切で平和であ  
った。我々の部隊は約一ヶ月そこ  
に滞在したことがある。その土地  
ではもちろんタウンダー語が話さ  
れていたが、タウンダー語とは別  
に、彼らの話すビルマ語には標準  
語のビルマ語よりはかなり古い発  
音が保存されていた。例えば、タ  
メンサーバ(ご飯を食べなさい)  
のタメンのメンはフランス語の鼻  
音と同じ音であるが、アインマ村  
ではタマンと発音している。ま  
た、「ほうきで掃く」ことをマン  
ダレーではダビエツスィー・レー  
ディと発音するが、この地方では  
タンミヤツスィー・レーディとビ  
ルマ語をビルマ文字で書く通りに  
発音していた。また、ムシブー(

チョンマゲはやめてしまったもの  
と思うがどうだろう。

この話は、われわれの先祖の東  
南アジアにおける行状が今日の日  
本人のそれとどう違っていたかを  
考えさせられるだけでも一読の価  
値があると思う。  
(筆者は前ビルマ大使。現メキシ  
コ大使。協会名誉顧問。朝日新聞)

ない)、ナーマレブー(解らない)  
マトアブー(行かない)等の打消  
のマブーのブーを略して話す。  
即ち、文語形を口語に使っている  
わけである。もちろんビルマ語で  
は文語体と口語体を判然と区別す  
ることは困難な場合が多い。  
ある朝早く、アインマの村長ウ  
・マウンデーがトーコエがわな  
にかかったのを見に行かないかと誘  
いにきてくれたので、三木さん(当  
時の曹長)と一緒に出かけた。  
道すがらウ・マウンデーに「トー  
コエは英語のワイルド・ドックか  
?と尋ねると、「いやフオックか  
スだ、マウンデー」辺りではビルマ  
語でミエ・ゴエ(きつね)と呼ん  
でいるだろう」というのである。  
行って見ると、それは全くきつね  
ではなく、日本語で何と呼んでい  
いか解らない動物である。第一、  
身体が大きさが大牛か水牛ほど  
あり、熊のように肥っていて、豹  
のような斑点があるが、色は黒  
白、口は狼のように耳元までき

ていて、見るからにどう猛そうな  
獣である。そして夜、鼠や農家の  
近くまで出てきて牛やその他の家  
畜を食べるそうである。トー・コ  
エはビルマ語の辞書には説明と訳  
がのっているけれども、実際私が  
西部ビルマで見たものと全く違っ  
ている。

カチン語のチャキヨンという  
語はビルマ語のミエ・ゴエ(きつ  
ね)、ウオンパルエ(狼)、トー・  
コエ(上述の動物、直訳はジャン  
グルの犬)ただし、標準語と方言  
では多少異った動物を意味してい  
るらしい)、コエ・ア(ジャック  
ル)きつねと狼の中間型)等のど  
れに対しても区別なく用いられる  
。アインマ村でわなにかかった  
このトー・コエもカチン人ならチ  
ャキヨンだと片づけしてしまうか  
も知れない。

さてチャキヨンであるが、カ  
チンの物語にはよくチャキヨン  
が出てきて、初めのうちは狼のこ  
とを言っているのか、きつねのこ  
とを言っているのかよく解らない  
ことがある。同じことがシャロー  
についても言えるのである。それ  
は虎も豹もチーターも普通にはシ  
ャローまたはローンである。カチ  
ン州はシャローやチャキヨンの  
多い所で一々区別しない方が便利  
であるかも知れない。  
首長族は私たちの在籍中、残念  
にも見る機会がなかった。しか  
し、この首長族についてはビルマ  
人やインド人から話にはよく聞  
いた。カロリーの町にいた時、ある  
ビルマ人の商人から聞いた話を紹介

しようと思う。ビルマに住む首長  
族とは一体どんな種族を指すので  
あろうか。それはバグワン族のこ  
とである。バグワン族の居住地は  
カレン州の西方にあって、彼ら  
自身をケコインドウと呼んでい  
る。南シャン州の南部地域を占  
め、カレンに属する一種族であ  
る。彼らの主たる特徴は女たちが  
よく目に立つ小指ほどの太さの銅  
製の首輪をはめ、首を長く延ばし  
ているという奇妙な風習である。  
それに極く幼い少女の頃よりはじ  
められ、最初は五つの輪がはめら  
れる。彼女が成長するに従って首  
輪が加えられてゆく。その結果自  
然に首が延び、二十一個の首輪に  
達するまで続けられ、二十一個を  
限度とされる。伝えられる所によ  
れば、昔中国より婦人の装飾とし  
て毎年一つずつ銀輪が送られたが  
その始まりだとのことである。また  
腕や脚にも同じような輪をはめ  
る。それ故、全体の輪でかなりの  
重量に達するそうである。この重  
量を身につけ、なおその上、家の  
仕事として水を運んだり、畑を耕  
したり、地酒を売りに遠い村市場  
まで交易に行ったりする。それだ  
けの重労働もこれらの婦人の健康  
をそれほど害するように思えな  
い。彼らの大いなる家には老婆が  
いて、子供の守をしなくてはな  
い。その点は楽である。婦人が言  
葉を話す時、首輪の重さのため首  
を締めつけられるような声を出し  
て話すのである。赤と青の縞のス  
カートを着て、胸の上には貨幣、  
果実の種子、色のついた石等を飾

っている。結婚は他の種族の者とも許されている。婦人は必ずしも醜いとは限らないが、恐ろしいほどの首長のため彼らの種族以外に求婚者を得ることは困難である。

彼らはカレン族に含まれるけれども、カレン人とは全く似ていない。言葉はタウンドゥ語に近似し、宗教としてナツ(精霊)を礼拝し、犠牲を供える。

サガインの地は私たちにとって懐しい思い出の多い所である。教回場所を変えて駐屯したことがあった。サガインという地名は「アカシアの木」の意味である。ピルマ語で書けば「シツカイン」と書いてサガインと発音する。サガインは歴史的にも有名な都であり、昔戦いのしばしば行われた所である。従って、「シツカイン」の「シツ」は「戦争」と関係があるように思われるが、「シツ」には「戦争」と「アカシアの木」の両方の意味がある、この場合は「アカシアの木」の方が正しいようである。伝える所によれば、ずっと昔、パガン王朝の末期頃、サンダムキーという女鬼がこの地に住んでいたが、イラワヂ河をいかにに乗って下ってきたマハ・タムバワヒスラ・タムバワという盲目の双子の王子がこの地に達して、弁当を食べようとした時、弁当を盗まうとして、この女鬼が手をのびそうとしたとたん、王子の一人につきまわり、ちょうど日本の羅生門鬼退治のような場面が起るうとしたが、情け深い王子はその

罪を許してやった。女鬼は改心し、その返礼として二人の王子の視力を鬼の魔力によって回復した。いまだに残っているユワリンという部落はヤリン(「光を得た、即ち、視力回復した」の意味)の訛りである。そして女鬼が王子につかまっていた場所にはアカシアの樹の枝がたれさがっていた、ということである。

また、パガン王朝時代には、チャンジッター王子がアノヤター王の怒りにふれ、パガンを去って、サガインのチャウンピユに身を隠し、美女タンブーラと知合ったのもこのサガインの地においてであった。その後、チャンジッター王が王位をゆずる際、彼には世継ぎの男子がいないと信じていたので、彼とアペヤター妃との間に生れた娘シュエ・エインティとソウユンとの間に生れたチャンジッター王の孫に当るアラウン・シートウを彼の世継ぎに立てたが即位二年目のある日、一人の男の子の手をひいてパガンに現われたタンブーラの姿を見て、チャンジッターはサガインに身を隠していた当時の記憶を呼びもどしたが、アラウン・シートウは戴冠を取り消すわけにはゆかなかった。王はタンブーラの子を北アラカン及び山地七藩の領主に任じ、タンブーラにはウーサウパン・トリロカワタンタカ(三界華鬘)という美称をあたえて第四王妃とした。タンブーラの子は後年、父チャンジッターの功績を永く後世に伝えるためミヤゼイ碑文石柱を建立したヤ

ザ・クマール王であった。

私たちはサガインの町から西へ五、六哩ほど離れたパガンヤットという村に数ヶ月滞ることになった。このパガンヤットは南に湖に面し、北はシュエポーに至るりっぱな道路が敷かれていた。この村は静かで景色がとても美しく、昼間の暑い太陽の熱が残っている乾燥した空気に湖の上を吹く夕暮れの涼風は実に心地よい感覚をあたえる。ピルマ人は夕方より真夜中までを歌と踊りを楽しむ。村人たちの唄う「ヤーザウイン・マツタンティン」の歌が毎夜聞こえてきて、ピルマの田園の楽しさがしみじみ味わえるのであった。

さて、サガインの町にミンミントンという婦人がいたが、外出の日には必ず彼女を訪問した。アラカン出身の美人でもあったが、ラングーン大学出のブルー・ストッキングでもあった。彼女からピルマ語を学び、私からは日本語を教えることに決めた。彼女はよくピルマの古典文学にふれ、ラインティク・ガウンティンのことを話してくれたことを憶えている。ラインティク・ガウンティンはコンバウン王朝時代の宮廷生活を描いた女流作家であった。コンバウン王朝時代にバヂーロー王に次いで王位についたタヤワディ王とその王妃ミヤガレの娘として生れたのがラインティク・ガウンティンで幼少より詩歌文学や音楽を秀でて、父王よりテイリマハーヤターサンダデウイの称号を受けた。彼女が十二才の折、母はある

事件に関係した疑いで処罰され、ライン王女はミンドン王に託された。彼女は宮廷に育てられ、年頃に達するに及んで美貌をうたわれ、文学や音楽の才能がますます長じていった。ミンドロ王の弟に当るカナウン王子と結婚したが、年月が経つにつれて多情な王子に對する恋と嫉妬に燃える心のはけ口を彼女は文学に見出した。彼女の作品の中で「インダウオン・オナ・ナンドウイン・ザットーデー」や「ウイザヤカリ・ザットーデー」等はよく知られているが、当時の私にはとても難解で歯が立たなかった。

ミンミントン女史は財産もあり、美貌もすぐれていたため、求婚者も多く、結婚について考えないこともなかったが、暑いピルマより住みよい外国で生活してみたい希望を述べていた。しかし彼女には親に孝行したい気持が強くピルマ婦人の美德を示していた。服装はインテリ女性に似合わず、いつもピルマの服装をしていて、この点他のラングーン大学の西洋かぶれのおしやれる婦人とはやや異っていた感じがする。

また、パガンヤット村にてケイ・エス・マニー氏(タミール人)について毎夕タミール語を学んだのもこの頃であった。

さて、時期はインパール作戦に入っていた頃であろう。我々の中隊もサガインを後にしてカレラに向って出発する日が近づいていた。(らっぱの)黒川さんと一緒に、親しくしていたピルマ人のお

ばさんでアメデーと呼んでいたが、その人の所へ、再びこの村へ帰ってこられるかどうかからないので、別れの挨拶をしに行っていた。その時、「セイ・マカウンブー」という言葉を聞いたが、それまでも何回となくその同じ言葉を聞いたことがあったが、いろいろな場合によって、いろいろな意味で使われていることを知った。その場合は「お名残り惜しい」意味であるが、直訳すると、「セイ」「心」+マカウンブー「悪い」、であるが、「心が悪い」という意味ではなく、上述の意味の他に「気が狂っている」「悲しい」「失望した」等の意に用いられることもある。

話は前後するかも知れないが、兵補係をしていた頃に兵補から学んだピルマ語を少し紹介したいと思う。ピルマ兵補たちは日本軍の訓練の厳しさとホームシックに耐えられず、逃亡する者が相ついで出た。私は兵補の逃亡を少しでも防げないだろうかと考えて、彼らが逃亡する前夜に何を計画するか、又は何を話し合うかを注意した。普通の場合、ピルマ人が日本人に對してピルマ語で話しかける時は最も解り易いピルマ語を話すのはもちろんである。従って、彼らの間で日本人に解らないように話すことも簡単にできるわけである。その時には彼らは盛んにバン・サガーというのを使う。バン・サガーとピルマ語特有な表現があつて、ちょうどアメリカ独特な言い廻しにはアメリカニズムがあ

り、フランス語風な言い廻しにはガリシズムがあるのと同じである。このパン・サガーという語法のなかには慣用的熟語、外国語のビルマ語化されたもの、故事、歴史上の事実、諺、スプーナリズム（二語以上の初頭音、または、中間母音が互いに転換すること）、卑語等が含まれていて、この語法に精通するには日本人には中々難解である。しかし、日本語の表現と大そう似たところもある。そこで、私は次の方法を考えた。夜、床に入ってからビルマ兵捕たちがべちやべちや話している言葉をちっと耳をすまして聞き取り、翌朝、記憶をたどってビルマ語で、前夜きいた言葉を、時には寝言などもノートしておき、一週間分たまってから、外出許可のあった時には必らずそれをもって、弁護士、高校の教師、作家、等比較的インテリで英語のできるビルマ人の家を訪問して、その意味を調べた。その結果、多少は兵捕の逃亡を防げたのではないかと思うが、私のビルマ語の勉強にも大いに助けとなった。（以下次号）

（筆者 大阪外大ビルマ語科 主任教授 協会特別会員）  
ブルーストッキング学才のある婦人  
ガリシズムフランス語特有の慣用語法  
（保科荘）

### ビルマの抗日文学 (二)

パモー・ティンアウン作  
「ヨーマの戦闘」  
大野 徹

ヨーマ。言うまでもなく、ペグー山脈のごとくである。その山脈に源を発しタウング市の南東でシッタウン川に注ぎ込むカバウン河の畔に、ピンター村はある。トゥンナインはこの村で生れ育ったが、両親はいない。

ある夏の日暮れ、村長宅のドラが激しく打ち鳴らされた。村民呼集のドラである。集まった村人に村長のウー・タウティンが漢字で書かれた一枚の紙片を片手に掲げながら、日本軍の承諾があったので、今後自分がこの村を統治すると発表した。村長はタウング市に住む地主から村の農地二十エーカーの管理を任されている。サヤサンが率いる農民一揆の時に一揆参加の農民の隠れ家を、官憲に通報して逮捕させたのはこの村長である。その中にはトゥンナインの父ウー・サントウンも含まれていた。終身懲役刑を宣告されたウー・サントウンはココー島で獄死した。長思いで床についたきりの母は、その数か月間にトゥンナインを残して他界した。だからトゥンナインは、叔父のウー・カウイ個正の許で育てられたのである。

村長の発表に次いで、村長とは普段大猿の仲のウー・ターミヤ先

生が立ち上がった。年はまだ三十前後だが村民の信頼は厚い。ウー・ターミヤは、タキン・アウンサンに率いられるビルマ独立軍の事を述べ、ビルマが独立を獲得するためにこのビルマ独立軍に協力する必要があることを訴えた。ついで二週間ばかり前、オウトゥンインやタウング方面から砲声が聞えてきたが、あれは英印軍の退却だったのだから、それとも日本軍の追撃だったのだろうか？

トゥンナインは、タウングにあるビルマ独立軍の事務所を訪れた。そこで初めて全国で活躍しているタキン達の動静を知った。話を聞いているところへ憲兵隊の西条曹長が部下を引き連れてやって来た。事務所内には若いタキン達と一緒に憲兵隊の本部に連行されたトゥンナインは、それから二十日間ばかり連日激しい拷問を受けた。それはまるでこの世の死獄であった。殴る、蹴る、逆さ吊りにする、水をガブガブ注ぎ込む。武器をどこへ隠匿した？トゥンナインとしては知る由もない容疑であった。やっと釈放されたトゥンナインは、日本軍一個小隊がピンター村へも捜索にやってきたという話を村へ帰る途中で聞いた。ウー・ターミヤ先生は辛うじて虎口を脱したという事であった。

村へ帰るのを断念したトゥンナインは、ペグー山脈の山頂にあるカレン人集落に向った。戸数三十戸ばかりその部落は、ここ二十年ばかりターコデーイが治めている。ターコデーイはトゥンナイン

の父ウー・サントウンの幼な友達で五十歳はとくに過ぎていたが、孤児のトゥンナインをよく可愛がってくれた。そのカレン人部落は丁度危機にひんしていた。竹の花が咲いたのである。竹の花が咲く年は凶作だ。

その頃、イギリス人の放置して逃げたチーク樹伐採の仕事は日本軍が引き継いでいた。「日本ビルマ・チーク生産組合」という名で、彼らはカレン人を労働者としてこき使った。食糧供給も命じた。提供できないカレン人村落は苛酷な仕打を受けた。カレン人の間では抗日蜂起が秘かにささやかれるようになった。トゥンナインは必死でそれを有めた。今蜂起しても無意味だ。抗日レジスタンスを進めている平地のビルマ人組織と提携して蜂起すべきだと言うのが彼の意見である。ビルマ人の抗日組織と接触するため山を降りたトゥンナインは、地区の抗日運動の指導者に会った。それはウー・ターミヤ先生であった。

この頃、インド国境戦線で名を挙げた日本軍の第五十三師団は戦線を撤退してペグー山脈に集結を始めていた。著しく勢力の低下した第五十三師団は、バウンデーからペグー山脈を横断しタウング近辺からシッタウン川へと脱出する計画を立てていた。ターコデーイの率いるカレン人ゲリラの抗日活動が始まった。五十三師団の首領陣は、配下の部隊がいつの間にか一個分隊、一個小隊と姿を消すのを知って驚愕した。シッタウ

ン川沿いに布陣して待ち構えている英印第十四軍よりも、このペグー山脈内の、目に見えない敵による被害の方が甚大だった。五十三師団は雨季の中、シッタウン川目指して脱出活動を開始した。多くの戦死者が出た。だが抗日ゲリラ組織の方も犠牲も少なくなかったのである。斃れたゲリラ戦士の中には、ターコデーイやトゥンナインの屍も混っていた。

作者パモー・ティンアウンは一九二〇年生まれ。五十四歳。作家としては脂の乗りきった年頃である。「大叛徒」、「母」、「医師イーチャン」など多数の作品がある。ウー・ヌ内閣当時、二度も逮捕投獄された経験をもつ。ネーウイン軍政権登場後も逮捕され、一九七二年によく出獄している。

（筆者は大阪外国語大学助教 協会特別会員）

### 「日本ビルマ文化協会」への提言

田 辺 寿 夫

一九七二年三月、京都の都ホテルで開かれた創立總會以来、私は、ビルマ語放送を制作するという立場から、取材その他を通じて、協会の皆さま方とおつきあいさせていただき今日に及んでおります。

その日本ビルマ文化協会が、いわば創世紀の数々の困難をのりこえ、社団法人として更に大きく

発展される日も遠くないとのニュースをきき、大いに喜んでおります。

今までの、私の協会に対する関心は、私たちの番組のための取材源としてばかりでなく私自身、日本とビルマの交流を願っているという個人的な気持も含まれております。ですから協会の外にはいまいが、協会の発展を願うことでは、会員の皆さんと変わらなかつたつもりです。

さて、世の中には「傍目八目」ということばがあります。協会がその発展の一つの節目にきている今、外にいる者から見た感想・苦言・アドバイスを呈することは無益ではないと思ひます。もちろん、浅い理解によるものや、誤解・曲解・若気の至りめいたものもあるかも知れませんが、広い心で読んでいただき、今後の運営・活動の足しにでもなればと願う次第です。

(一)私は昭和十八年生れ、いわば戦争の記憶のある最後の世代に属します。その私から見て日本ビルマ文化協会には、戦友会的な色彩がまだまだ色濃く残っているように思えます。

協会の発起人の方々、そして今も協会の中核をなつて活躍されている方々の多くは、戦時中、ビルマで軍務に従事された人々であるのも事実です。戦地として赴いたビルマに限りない愛着を抱き、親しく接した、或いは命を助けてくれたビルマの人々に恩返しをしたいという、これらの方々的心情

は、それはそれで素晴らしいものだと思います。また、日本軍が進出したその他の地域、例えばフィリピン、マレー、インドネシア、それに中国などについては、そのような動きが殆んど見られないだけに、ビルマへ行かれた人々のビルマとの友好・親善を深めようという動きは注目し値すると云えましよう。しかし、関係者にとつては何でもない、ごく当り前の事情であり、行為であつても、全体的な状況から云えば、極めて稀なものとして受けとられるだけに、そんな心情の人々が集まつて組織的な行動を起こそうとする時に、注意せねばならない点がいくつかあるようです。

まず第一に「時代錯誤」をいまいしめねばなりません。戦時中のビルマではあるが、ビルマはこうなんだ。私達がいけば、ビルマの人達は必らず、心から歓迎してくれるのだ。」といった思いを抱き勝ちのようです。巡拝団や慰霊団としてビルマを訪れる際にはもちろん、日本国内で何か親善の行事が行なわれるときにも、そのような素朴な心情が動機を大部分を占めているように思ひます。それが動機でどまつて思ひます。それはともかく、行動の全てまでを支配してしまふ傾向が心配です。

戦後二十九年、そのころのビルマと、独立斗争・内戦・議会制・軍政を経て「社会主義共和国」となつた現在のビルマは、色々な点で随分違つてきています。しか

し、ビルマ人の気質そのものが変わったわけではありませぬ。ビルマの人々が日本から来た旅行者をあたたかく迎え、手あつくもてなしてくることにかわりはありませぬ。また、日本へ来るビルマの留学生・研修生の方々の私たちに對する接し方も、友情にあつく、心暖まるものがあります。

だからといって、すぎ去つた戦争の時の日本人への思い出がそうさせるのではないのです。私ほもちろん、皆さんのビルマに寄せる心情とそれを支えている感動的な体験を否定するものではありません。

しかし、自分達の国土に三年以上も居坐りつづけた日本軍、ビルマの資源を奪いつくした行為は、戦後、苦しい独立斗争から内戦に続く時期に、そして今日に至るまで、ビルマの発展のための大きな阻害要因として、明白に指摘されています。

また、協会報にも紹介された抗日文学の数々や、最近のベストセラー「トウエ」にも、戦争が残した大きな傷跡がうかがえます。私が自分自身をいまいしめつつ、皆さんにお願ひしたいのは、ビルマ人に接する時、あるいは協会の事業を推進するとき、個人的な体験にのみ頼ることなく、日本人としての、キチンとした戦争への反省の上になつて、現代のビルマを理解した姿勢であつていただきたいということですが、

そのことが、今なお、私たちに期待をかけ、暖かく迎えてくれる

ビルマの人々に酬うことにつながるのではないのでしょうか。また、この問題は今後の協会運営上の最大の課題とも云える「若い世代への橋渡し」とも深くかかわつています。

戦中に生まれた私の年代はともかく、戦後生れの人々に、戦争体験はストリートに伝わるものではありませぬ。キビシクいえば「年寄りの繰りごと」と、とられたり、あるいは活劇的な興味本位なものとしてしか受取られない感があります。

日本ビルマ文化協会の今日までの歩みを見ても、発足当時から大いにさげはれてはいた若い人の参加が仲々進まなかつたのは、やはり、協会の皆さんの戦時体験が一般化した形で、若い層に伝わらなかつたからではないかと考えられます。

その意味で言えば、最近、ビルマ語を学ぶ若い人々が、協会に参加されたニュースは、大へん喜ばしいものです。願わくば、年輩の方々が、自分達の体験と感慨にのみとらわれることなく、戦争に関しては、大局的な歴史的な観点からの反省をも加えて、現代の日本人として、若い人々とも協力して、ほんとうの意味の親善活動を推進してゆかれますよう期待したいのです。(筆者はNHK国際局アジア部ビルマ語番組担当プロデューサー)

ビルマ国婦人よりの書簡  
次に記載する書簡は、中部ビル

マのピョーブエー市に住むアスエサント云う婦人が、族先のマンダレーから最近、原田特別会員(大外大ビルマ語科教授)へ、送付したものである。

文面にもある如く、此の婦人は少女の頃、ピョーブエー市に駐屯していた日本の軍人達から受けた温情が、卅年経つた今日でも、忘れられず、トエータウ誌を通じて知つた、チツマンヌエ先生(原田教授のビルマ語ペンネーム)に、その軍人達の安否を尋ねた書簡であり、あの悲惨極まりない戦争体験を通じて結ばれた日緬両国民の恩讐を越えた強い絆に、深い感動を覚えると共に、今尚、日本への限りない思慕の念を有つビルマ人の存在する事を此の書簡は如実に物語つてゐる。(保科記)

チツマンヌエ先生へ

謹んでこの書簡をお送りいたします。見知らぬものからの突然の書簡で、お驚きになることと思ひます。

実は私、チツマンヌエ先生の書かれました「日本文学史概説」(トエータウ誌に十回連載されたもの)を注意深く読ませました。それ以来、その書簡(一九七二年九月号)で、チツマンヌエ先生のご帰国に際して「御挨拶」を読み、それからまた東京NHKから放送されました「ビルマ農民の日に寄せるメッセージ」全文を、同誌本年三月号で拝見させていただきました。読者

の一人として、私がチツマンヌエー先生を、ずいぶんまえから存じ上げておりましたが、書簡を差しあげますのはこれがはじめてでございます。

日本とビルマの友好関係が永劫につづきますよう、私は敬尊像の前で何回も何回も祈願いたしてまいりました。

チツマンヌエー先生は、ビルマに長く暮らされてビルマを愛しておられ、ビルマの第二の都でありますマンダレーを特に賛美しておられますことを限りなく嬉しく存じます。

愛着を感じておられますように、私も、未知なる日本ではありませんが、深い絆があるように感じています。

そのわけを申しますと、一九四二年、第二次大戦中、親密になった二人の軍人さんのおかげでございます。

ビルマ中部、ヤメディン県、ピョーブエー市へ軍政官として赴任されました原口部隊の原口さんと島崎さんの二人のことが、いつとも思い出され、そのたびごとに大きな感動を感らせているのでございます。

この世に存在するいろいろな民族、いろいろな宗派の人々、また、いろいろな組織・団体、グループというものの中には、あまり好ましくないものもあれば、好ましいものもございません。そしてあまり好ましくないものが巾をきかせているときには、好ましいもの

の影が薄くなりがちでございます。陽の目を見なかつた善良な人たちのことを、ですから私は機会あるごとに書き表わし、心の中で賛美し感謝するのでございます。

一九四二年第二次大戦中は、私はまだ十三歳でございました。原口部隊の原口日本語学校が開校されたとき、私は真先にその生徒になりました。ここで私は原口さんと島崎さんを存知あげました。島崎さんは、私を自分自分の娘のように可愛がって下さいました。私は、原口さんと島崎さんが方々へ行かれるとき、よくついでに行きました。

ピョーブエー管区に発生するあらゆる問題について、島崎さんたちが常に公正な判断でことを処置して下さいました。よその部隊の人がピョーブエーに現われて、何か粗相をしてかした場合には、島崎さんたちは直に公衆の面前で誤りのないよう処理して下さいました。

島崎さんたちは町の長老の人たちとも、ドバマアシアオン（政治結社）とも、また学生自治会の人たちとも、誰とも仲良く交流しました。単なる交流以上のことを示して下さいましたから、老若男女みんなが島崎さんをお父さんと呼びました。

B・I・A（ビルマ独立軍）と日本軍が協同して治安維持に当たっておりましてある日、突然、憲兵隊が私の義兄を逮捕し、連れ去りました。

私たちが家族のものは悲しみ泣きました。誰にも救いを求めることができませんでした。その上、兄は今日明日にも殺されるとのうわさも流布しまして、姉は気が狂わんばかりに泣きました。折りも折りに姉は身重の身でしたから、みんなの受けました衝撃は、まことに大きかったです。私達、私たちの家は商売をしていました関係で、いろいろな人につき合ねばなりません。それに私の父は中国系のものでしたし、私たちもその血をうけておりますものから、信用していただくのが至極困難で、本心に心細く思われまして。丁度捕に捕われたねずみかたのでございます。

みんなが悲観にくれておりましたとき、私は母と姉に、原口部隊の島崎さんをお願いをしてみたら、と申しまして、それから姉と私とで島崎さんをおたずねし、真実を訴えました。姉は泣きじやくりながら、夫には何の罪もないことを申しのべました。

姉が泣くものですから、私も泣きました。島崎さんは、うん、うんと首肯すいて聞いて下さいました。そして私の頬からこぼれる涙を、父親たちがするうちに、やさしく拭って下さいました。そして「心配しないで、私がよく説明しますから」といわれ、それから憲兵隊（山田さん）のところにへ行かされた、この次第を正確に伝えて下さいました。おかげさまで、兄は死の寸前で助かりましたのでございます。

その後一九四三年一月、ピョーブエー市に、英軍の飛行機がはじめて飛来し爆撃をおこないました。その結果、不幸にして二〇〇人以上のピョーブエー市民が死傷し、私の父も負傷しました。父の傷は胸に一チャット硬貨大の穴があき、あととして、心臓に達する危険なものだと、軍医の井戸先生が申されました。たくさんの血が、口からも、胸からも流れ出ました。とてもひどい傷で見るに見兼ねました。

戦争というものは何とおそろしいものか、思い出すたびに脊筋が寒くなり、身体が震えてまいりました。どうか二度と戦争のおこりませぬよう、永久に世界は平和であってほしいと、心から祈願しました。

私の生涯で、その日ほど恐怖に満ちた日はございません。朝の十時、もとも賑やかなピョーブエー市の市場附近に爆弾が落ちましたものから、多数の人が死にました。ピョーブエー市民たちは、恐れ戦き、右往左往狼狽し、田舎へ避難するもの、死者を悼み名前をあげては傷み悲しむもの、死者を仕方なくゴザにくるもの、タンカにのせ、坊さんの枕経をあけることもなく、そのまま埋葬するもの、たくさんの死体を自動車に積み、葬式もなく一つ穴に埋葬するやら、てんやわんやの仕末と相成った次第でございます。

市民たちの多くが避難しましたために、その日の日暮の頃には町中が閑散となり、人影が見えなくなりました。私たちが家族だけが残されたような感じがいたしました。私たちがその日避難しませんでしたのは、父の傷が軽微なものでなく、診療のできないところへ連れて行くわけにはまいりなかつたからでございます。そのとき、もしも父を移動させてしまったら、間違ひなく死んでしまったことでございます。

ですから、家族の者は皆、避難することに不賛成でございます。ビルマ式に表現してみますと、市内はかさかさに乾いてしまひ殺伐化したと申す他ございません。ただ、犬の遠吠えや、鳥のガーガー泣く声やらで、甚だ無気味に思われました。すると、また鳥たちが群をなして飛び立ち何となく靈魂や幽霊が、やたらに往来しているかのように思えてなりませんと。恐ろしく静かになつたかと思ひますと、何処からともなく、傷ついた人たちの悲鳴やら泣き声が耳に入ってくるような気がいたしました。

その日の夜の七時頃、父は又もや血の塊りみたいなものを吐き出しました。もう駄目だろうと、みんなは諦めかけました。その夜、幸運にも、島崎さんをはじめ医師の井戸先生、瀬川さん、志賀先生など大勢の方々が見舞に来て下さり、容態を調べ、注射を打ったり、薬の手当をして下さいました。軍医の井戸先生の四ヶ月にわた



る診療の甲斐がございまして、父は無事に元通り元気になりました。

これには島崎さんの並々ならぬお力添えがございました。このように、私たちを親身になって協力して下さったみなさん、死の淵を彷徨し、たいへん苦しみ抜きました家族たちを救って下さいました、命の恩人、島崎さんたちを、私たちは決して忘れることができないのでございまして。

その頃、私たちは、やはりピョーブエーの郊外の小さな村に避難しておりましたが、一九四四年六月、島崎さんと原口さんが、いよいよ日本の東京へお帰えりになるとのことで、ご挨拶にお見えになりました。それを聞きまして、私たち家族のものは大変なショックをうけ、私自身はどう表現していいのか、ひどく悲しく寂しくなつて、ギョーギョー泣きました。島崎さんが、彼の住所と写真を下さいましたので、私も住所と写真をお渡ししました。

しかし、島崎さんの住所と写真は、残念ながら、盗難にあつたとき一緒に失ってしまいました。ですから私の愛する島崎さん、即ち日本におられるお父さんへ、手紙を書くことができませんでした。

さて、チツマンヌエー先生、私の日本にたいする絆が奈辺にありますが、お分りのことと思ひます。私たちの恩人の消息が知りたいのです。彼らのご家族のみなさんもお元気でないでしょうか。

お年を召され、流転の波に向つて、どのようにお過ごしでしょうか、色々想像しております、私の愛する日本のお父さんと別れてから、これを認めます間に、まる三〇年が過ぎ去りました。私自身の人生にも、種々の苦難が襲つてまいりましたけれど、日本のお父さんのことは一日も忘れることができませんでした。

チツマンヌエー先生をはじめ、皆様方が、日本とビルマの親善促進のため努力されておりますように、私も、微力ながら、両国の友好関係の増進を願ひ願ひ張りたいと思ひます。日本とビルマの友好親善関係が、この地球の存する限り、確固たるものでありますよう希求して止みません。

チツマンヌエー先生、島崎さんを探して下さい、それから、原口部隊のすべてのみなさんにも、「ビルマのアスエサンが、いつも懐かしく思い出しています。」と私の気持ちを伝えて下さいませ。

島崎さんの住所は、先に申しましたように失いましたが、彼についての目星しい印象のいくつかを示すことはできます。彼はビルマに來られましたとき、原口部隊に所属し階級は中尉でした。東京・毎日新聞のエディターの一人でした。奥さんと子供が三人いました。黄綬帯をかけておられていました。彼が自動車を出掛けるときにはブルーの旗をあげておられました。彼はまた、英、独、露の三カ国語をよくこなしておられました。以上、記憶す

る限りのことを記しました。私たちのピョーブエー市のため、住民のため、私たちのため、諸々の問題を解決するに當つて、誠をつくされた将校さん、兵隊さんのみなさんにたいし、この書簡は、記念すべき記録となりますよう……

トエタウ誌を通じ、チツマンヌエー先生よりのご返信を心待ちにしております。ご健勝をお祈り申しあげます。一九七四年七月六日

ピョーブエ市 アスエサンより (原田教授訳)

留学研修生コーナー

日本占領時代のビルマ史に関して

東京教育大学研修生 ウ・アウン・ケイン

私は大学院研究生として、昭和四十七年の十月に日本へ來まして、それから昭和四十八年の三月終りまで、今までの留学生たちと同じように大阪外国語大学で六カ月間程(休日を除く)は勉強して六十三日だけ、日本語を勉強してから東京へやつて來ました。最初の目的はビルマの文部省の勧めによって、近代東南アジア歴史を学ぶ予定でした。しかし、日本の大学には東南アジア歴史学科はありませんし、東洋史(中国史と西洋史と日本史以外は教えておりませんので、最初

の目的を変えまして、主として第二次世界大戦中における日本とビルマの関係と協力史を去年の中ごろから研究しています。私がビルマで専攻して修士号を得た専攻科目は、現代西洋史とイギリス植民地時代のビルマ農業経済史です。そして日本へ來てから、日本軍政時代のビルマ史を専門に研究して

ますが、歴史的事実資料を初めに検討し直さなければならぬ状態にあります。さらにその上、日本の諸文献を調査する際に、日本語の難しさを克服しなければなりませんので、困難が二つあるという訳です。しかし第二次世界大戦中の、または日本占領時代の東南アジア史は、歴史上において明らかに新時代と認められ、これを一つのテーマとして研究することは価値のあることではなからうかと思ひます。

日本の行政は占領地軍政だけではなく、全面的に東南アジアの地域の人々の生活へもいろいろな方面から干渉しました。即ち、大東亜戦争の戦場となった国々の運命は、その国民の好むと好まざるにかかわらず日本の戦争の影響下となったのです。ビルマも日本占領時代に大きく深く変わった国であるのは否定しがたい事実の一つです。

昭和十七年から二十年までの短い間に、日本軍政がイギリス植民地支配を倒して、その代りに大東亜共栄圏計画にうまく適合させるべく、全く新しい秩序を樹立しました。この新しい秩序の直接効果

とあとに続いて起つた影響は、非常に広くかつ強烈だったので、ビルマの人々の生活に全面的に浸透しました。日本軍の收退のあとでも、軍政の影響はビルマ諸民族の間に残りました。日本占領時代に起きた社会変化過程と政治勢力は引き続き戦後までに連鎖反応のようにその影響をビルマ国民の上に及ぼしました。

だから、日本占領時代は時間的には短いにもかかわらず、現代ビルマ史においては特別な時代であると考へられます。なぜならば、歴史上の時代とは期間の長さに関係なく人間社会に及ぼす影響の広さによって判断されますから。さて、戦後に日本占領時代に関して、ビルマ、日本、イギリス、アメリカなどでさまざまな文献が徐々に出版されてますが、種々な意見と解説が広く頭われて來ました。

この時代について最初に書いた人はアウン・サン将軍でした。昭和二十年八月二十九日に東西協会の集會にアウン・サン将軍が英語で演説した内容「抵抗運動」と言うタイトルで、「ビルマ挑戦」と言う本を出版しました。この「ビルマ挑戦」は昭和二十一年に出版されました。同じ年に出版したウィーンの「五年間のビルマ」(ビルマ文英訳もある)も昭和十六年から二十年までにビルマに起つた出來事を責任あるビルマ人として記述し、日本軍政に接近し観察して書いたものです。彼は当時の外務大臣でしたが、彼の本もアウン・

大臣でしたが、彼の本もアウン・

サンの本と同じような権威を持っていた。

有名な三十人のビルマの志士の一人であるポー・ミン・ガアウンが書いた「アウン・サン將軍と三十人の志士」と言う本はアウン・サンがビルマ独立奮闘のため日本へ出発する旅程から始まって、三十人の志士がハイ・ナン(海南)島で軍事教練をしたこと、独立軍隊を創設したこと、反ファシスト抵抗運動をやったことなどまで書いていました。この本の記述形態はビルマの読者達に理解出来るように書いた歴史物語であります。が、日本占領時代のビルマの歴史を勉強する人達のためにも適切な参考資料の一つとなっています。この本をも誰れかが日本語に翻訳すべきであると思います。

この他にも一部の老練な政治家達が戦時日記と想い出について書いたものもあります。

例えば、リン・ヨンタツ・ルウインが書いた泰緬鉄道体験日記(一九六八年出版)があります。

この泰緬鉄道を開通するにあたって数々の虐待を受けて、苦痛を味わったビルマ人民の事について明瞭に書かれております。この鉄道をビルマ国民は「死の鉄道」と名づけました。この鉄道建設のために五万のビルマ人が死んだとアウン・サン將軍自ら話してました。

他の本もあります。「日本占領時代のある病院での想い出」という本です。この本は一九六七年に出版され、著者はミン・ソエ

医師です。彼は日本占領時代を通じてラングーン病院に勤務していた愛国的医師の一人でした。彼はアウン・サン將軍を始めとして色々な立場にあった人々と交流があったことを広い視野から書いていますので、日本占領時代のビルマ人の生活を観てどのビルマの国民が日本占領時代にどのように反応したかを書き表わしています。抵抗運動と関連して三〇人の志士の一人であるジョー・ツ中將が書いた「反ファシスト革命」(一九五九年出版)も読んでおくべき本の一つです。ウー・ラの「新聞が語る戦時中のビルマ」という本には本時刊行された新聞記事を集めて本にしたもので、要点、ニュース共に完全なものであると言えます。ティン・ペー・ミンの「ある戦時旅行者」という本には、当時インドと中国へ行って連合軍と接触した人の想い出が書かれています。抵抗運動の歴史はこの本の中に書かれていて重要な事実を抜きにしては言い尽せないでしょう。

ミン・ニョ中尉が書いた「日本占領時代の軍事大学」(一九六九年出版)にはミンガラドン飛行場の近くにあった軍事学校で軍事教練を受けたことについて詳細に書かれています。彼自身が軍事教練を受けた者の一人でしたので、当時の軍事教練がいかに乱暴で残酷なものであったかを書いていきます。この本はビルマ防衛軍の歴史の中で貴重な一頁を占めております。さらに他にもネー・アウン志

士の「抵抗運動の想い出」タン・ティン・ミヤの「抵抗運動司令部と十の地域」(一九六八年出版)や、タキン・ルインの「日本占領時代のビルマ」等の本があります。

第二次世界大戦が終わってから十九年経ちました。日本占領時代が終わってからも同じく二十九年の歳月が流れました。しかし歴史の観点から検討するならば適切な評価を得るにはまだ時期尚早であると言わなければなりません。この過去の時代のことは戦前の世代と戦争中の世代の記憶の中に生き続けているので、そして浮き沈んで生きます。歴史の歩みはほぼ十年毎に起こりをして絶えず変わっています。ですから今の時点で日本占領時代事柄に関連して歴史的判断を下すことは主観的な個人的なものであると思います。実際には、一人の個人があるいは特定の集団が歴史上の判断を下すことは出来ません。その国の人民大衆のみが下すことが出来るのです。

歴史家は最終の歴史的判断を下すことは出来ません。しかし、そこで彼は彼の見解を述べているに過ぎません。ですから日本占領時代に関する真の歴史的判断を下すのは国民大衆と将来の世代の人々が下すことになるだろうと私は思います。

(筆者はラングーン文理科大学講師。文章は筆者自身の記述のまま。)

ラングーンと

シュエダゴンパコダ

大阪外大研修生

ウ・モン・ゼイ

ビルマの首都ラングーンは、ラングーン河沿岸、南部ビルマのデルタ穀倉地帯の中心に位し、海岸より約二十一哩入った所にあり、南部はラングーン河、東部はパツンダウンクリークと境を接している。人口は約二百万人である。

ラングーン、マンダレー間を走って来る汽船で、ラングーン河へやって来る人は、ラングーンの数哩地点から、巨大な鈴の型をしたドーム即ちシュエダゴンパコダを瞥見する事が出来る。そのパコダはシンガアトラの丘の北方二哩の所にあり、約二千四百年の歴史をもち、仏舍利が安置してある。心像の象徴として、此のパコダが長い年月を闊して来た事は正に驚愕に値すると思う。

パコダの底部は周囲が一千四百二十呎あり、仏塔は三百二十呎の高さで、その底部を小さなパコダ群が囲繞しており、又プランティン(薔)の蕾の所までは黄金色の葉が仏塔をすっぽり包んでいる。その薔の真上にある傘の翼の上は五千個以上のダイヤモンド、それに二千個以上の貴石や半貴石で出来ている。

にそり立っているのである。

シュエダゴンパコダの写真と対比しながら此の原文を訳してみましたもの、私自身、納得し兼ねる記述がありました。併し一応原文のまま訳しておきました。

プランティンの薔(PLANTAIN BUD)は仏塔の高さ二百三十呎の所にあり、形状がプランティン(バナナと同種類の木)の蕾に似ているので此の名が付してある。

傘(ビルマ語のHIT)は仏塔の高さ二百八十二呎の所にある。(保科記)

元日本兵の息子さん

京都大学ウイリス研究所 研修生 ウ・テツ・ウイン

第二次世界大戦の時、彼の父親がビルマで死んだのは、彼がまだ十六才の時でした。今では、彼も十六才になり、あれからに己に



現場のウ・ダン・トン

三十年の歳月が流れ去りましたが、併し彼はビルマで死んだ父の事を今でも忘れようたつて忘れる事は出来ないのです。

彼こそ外ならぬ山田さん、ビルマの土と化した元日本兵の息子さんなのです。

これから述べる事柄はビルマで他界した父を心から愛し、年老いた母をこよなく慈しんでいる山田さんが、父の埋葬された場所を、ある一人のビルマ人の手助けに依り、どの様にして探しあてたかという事に就いての物語りです。

さあ、では早速始めさせていただきます。

一枚の地図、一本の樹木、一条の道路——これだけが山田さんの確認している証拠物件でしたし、山田さんは只地図の上だけで父親の埋葬された場所を知っているに過ぎませんでした。そしてその場所は「メザ」(MEZA)に通じる道路の傍にある事を、亡父の遺体を埋葬した亡父の戦友、堤氏から已に聞いていました。

「山田さん！もしも貴方がその道路の写真を入手出来たら、お父さんの亡骸を埋めた正確な場所をお教えしましょう。」と亡父の戦友は云いました。

斯くして、山田さんは件の地図を片手にビルマへ出掛け、埋葬場所を見つけたために色々と八方手を尽しましたが残念ながら徒労に帰しました。彼は失敗しましたが、挫折するどころか益々初志貫徹の意態を燃しつづけていました。山田さんは在日ビルマ人と会

う機会があれば必ず亡父の事を話しかけ、我々が在日ビルマ人は彼の心情に同情しながら彼の話しに耳を傾けてきましたが、その事は我々の力の及ばない事であり、残念ながら何もして上げる事は出来ず空しく歳月が経つただけでした。

併し、ある日、正しく山田さんにとつては「生涯の最高の日」とも云うべき日が訪れたのです。その日こそはビルマの教育使節団の一行が京都を訪れた日です。その日、日緬文化協会の有志諸氏並びに在京ビルマ人有志が京都ホテルで歓迎パーティを催したので

が、一行の中に恰も山田さんの望みを叶えるために仏様が日本へお遣わしになった様な人が居り、奇しくも山田さんはその人に邂逅したのでした。

そのビルマ人は、ウ・タン・トンと云いサガインはオンドウ公立中学校の校長でした。山田さんはいつもの如く「メザ」と亡父の物語りを彼に報告しましたので、ウ・タン・トンは大変山田さんに同情し快く協力方を申し入れたのでした。

扱て、それから「奇跡」が起つたのです。

ウ・タン・トンは滞日一週間後にビルマへ帰り、サガインに着くや、早速約束通りその場所へ出かけ、地図を便りにその附近のあたりをこしらで、沢山の写真を撮りまくりました。例へば墓地、車道、チークの老木等を……。

間もなくウ・タン・トンは二十数枚の現場写真を山田さんに送つ

てきましたので、彼は早速亡父の戦友に見せました。亡父の年老いた戦友は声をはずませながら云ひました。

「ああここだ、ここだ。確かにここだ。この道の隅っことは今でも私の心眼に映っている。此のついでに貴方のお父さんを埋葬したのだ……」

山田さんは大喜びですぐに私の所へ飛んで大声で、叫びました。

「テツ・ウインさん！とうとう見つかりました。ここで親父が埋葬されたのです。……」  
山田さんと彼のお母さんの喜びや、筆舌に尽し難いものがあつたでしょう。



現場のパコダ

六十九才で今尚ほ健在の彼の母さんは死ぬまでには是非とも亡父の埋葬地を知り度いと念願されていましたが、今やその希望も叶へられました。私は彼女が心安らけ、一日も長生きされる様衷心より希望すると共に山田さんの亡父

とその亡き戦友達の冥福を祈念するものです。

私がお話を書いたのは、山田さんの勇気と彼の亡父に対する愛情に對し敬服したからです。そして最後に自国人に對するのと同じ気持ちで山田さんに協力したウ・タン・トンの厚情に同じビルマ人として心より称讃の拍子を送り度いと思ひます。

日緬両国のとこしえの友誼のために、此の拙き文章を年老いた日本の兵隊さん及び彼等の愛する人々に捧げる。

ウ・テツ・ウインの物語りに記載されている様に、サガインのウ・ター・トンから早速山田さんへ二十数枚の現場写真が送られてきましたが、それと一諸に左記の書簡も送られてきましたので、茲に御披露申し上げます。(一部省略)(保科記)

親愛なる山田様

御手紙拝受しました。過日御送付申し上げた写真、未だ受領されていない由、誠に恐縮しています。私は帰国後、夜行列車でメザへ行き貴殿の亡父及び彼の戦友達が永久に眠っている地区の写真を撮りました。

その地区は「メザ」から約半マイル離れた所にある「ナンタイ村」のすぐ側にあります。

近所に住んでいる八十二才の老僧の言うには、「此の附近では戦斗はなかったが、「メザ」周辺

に駐屯していた多数の日本兵達はマラリヤに罹つて死んだ……」と。それで私はマラリヤで死んだ日本兵達の埋葬されている場所へ行ってみました。そこに曾てあつた森林はどうの昔に伐採され今では農場になっていました。併し貴殿の地図に記してあつたあの古いチークの木は今でも健在でした。

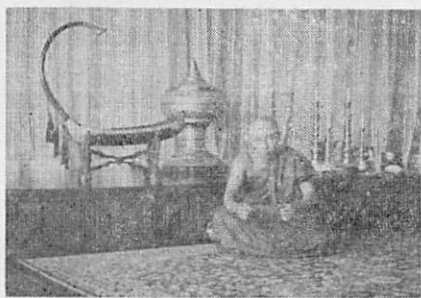
此の手紙と一諸に二十数枚の写真をお送りします。貴殿並びに貴殿のお母さんが、貴殿の亡父が埋葬された場所の写真を御覧になりそして、その場所では現在、大変美味しい野菜や穀物が恰も貴殿の亡父や亡き戦友達に對する平和の証の如く、生産されているのをお知りになれば、必ずや深く満足されるものと信じて疑ひません。現在、貴殿のお母さんが感得されている幸福は私が写真を撮る時受けた苦勞や困難に對する忘れ得ぬ極めて貴い御褒美である事を、どうかお母さんに仰しやうて下さい。

ター・トンより

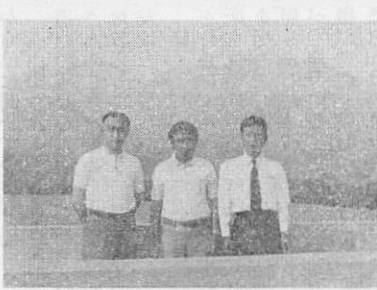
ウ・モン・モン・サン 僧院に入る

鹿児島大学水産科に在学中のマウン・マウン・サン君は夏季実習の九州沿岸航海の途中、門司にて下船、平和パコダ僧院に入り、正式の得度式を済ませ、黄衣一枚の戒律厳しいボンデー生活を体験した。

御承知の如く小乗仏教国ビルマ



修業中のモン・モン・サン君



森・岡本両理事とモン・モン・サン君

では、仏教が一般民衆の日常生活に深く浸透し、男子たる者一生に二回以上仏門に入らねばならず、偶々八月五日が同君の誕生日に当たっていたので、此の日に仏門に入り、善根を積むのが最も有意義であると判断したのである。

高度文明社会の日本に留学しながらも、敬虔なる仏教徒の生活を

忘れない同君に更めて衷心より敬意を表する次第である。(森賢記)

来日第一印象

大外大研修生

ウ・アウン・タン

私は今年の四月五日に来日しましたが、第一印象は日本人は非常にダイナミックな人間である事。気候は私自身にとっては好ましくなく、変化がきつ過ぎる事。交通の便は素晴らしい事等です。今回の会報にはもっと沢山書きますので此れで御容赦願ひます。

ウ・テツ・ウイン帰国

昨秋、コロンボプランに依り来日、京都大学ウィルス研究所にてトラホーム治療の研修に従事していた、ウ・テツ・ウイン(保健省医務局勤務)は予定の研修を修了、九月廿一日に帰国します。

同君は科学者としては珍らしく文才に卓け、且つ自国の説話、口碑に就ては実に博識があり、毎回会報に興味のある物語を投稿してくれて、我々を大いに裨益してくれました。(伝説の鳥「ヒンダア」八月掲載、「タワグウー」九号掲載)

茲に改めて、同君に対し深甚の謝意を表します。離日に当り、同君より左記の挨拶状がきていますのでお知らせします。(保科記)

御挨拶

帰国に当り、私は日本ビルマ文化協会の皆様にお別れの御挨拶をさせていたいただきます。先づ最初に、私の滞日中、ゆたたくして親切な、清らげくして明けびつらな心情もて、私に御厚誼を賜った皆々様に對し、心の底から深く御礼申し上げます。

私は帰国後は緬日兩國の親善を促進するために最善を尽す事を茲にお約束致します。

又、ビルマ国へ来られる日本の方には、出来る限りの御協力をさせていただきます。どうかビルマへお越し下さい。どなたでも歓迎致します。ビルマへ来られる前には、日本語でも英語でも結構ですから、必ず私にお手紙を下さい。前以て段取りをさせていただきますから。それと、ビルマ留学生協力係りの保科氏に連絡して下さいても結構です。

縦ひ貴方が私の知らない人であっても、御心配に及びません。始めは知らなくても、すぐに知己になるものです。歓迎致します。私はビルマに於ける皆々様の御世話を進んで引き受けさせていたいただきます。大事な事を言い遺しましたが、最後に私は息子の如く、弟の如く、親友の如く私を庇護して下さい、皆々様にもう一度、「大変有難うございました。」と申し述べます。皆々様の人生航路に於て、成功

と幸福が満ちる事をお祈りします。 さよなら

テツ・ウイン

日緬文化協会の皆様へ

テツ・ウイン君 (U THET WIN) のビルマに於ける連絡先は左記の通りです。

HOME: 32E. 6 1/2 MILE,

PROME RD.,

RANGOON.

TEL: 31622

OFFICE: VIROLOGY

RESEARCH

DIV., DEPT.

OF MEDICAL

RESEARCH.

NO. 5, ZAFAR-

SHAH RD.,

RANGOON.

TEL: 12033

新研修生の研修先内定

目下、大外大で日本語を勉強している新研修生七名は、今秋十月左記の大学へ落ち着き、それぞれ専門分野の研修に入る事になっています。(笹木記)

ウ・ポウ・タア

名古屋工業繊維維大

ウ・モン・ジイ

信州大学

ウ・アウン・タン

京都工業繊維維大

ウ・キン・モン・ウイン

ウ・キン・モン・ウイン

ドウ・テイ・テイ

ドウ・テイ・テイ

桑名への旅

京都大学ウィルス研究所 研修生 ウ・テツ・ウイン

ある日のこと、京都在住のKさんから桑名へ行くかと誘われました。私はズット前から桑名在住の未知の友人達に会い度いと念願していたので大変嬉しかったのです。

授て、読者諸氏は未知の友人と云う字句をお読みになつて、何か狐につままれた様に感じられるでしょう。

それでは先づ未知の友人に就て説明させていただきます。

五月九日、私は過労のため病氣になり、臥床していましたが、ある日いつも私の健康や安寧に気を遣つて下さるKさんから電話が有り、Kさんの言うのに「桑名在住の私の友人達から貴君宛に大きな小包が到着した。併し彼等は貴君にとっては全く面識のない人達だよ。……」と。私はKさんからそんな言葉を聞いて全くびつくりしました。

翌日、私はKさん宅へ行き、Kさんと一緒に小包を開けました。中から沢山の贈物がゾクゾク出てきました。粉ミルク、チーズ、砂糖、コーヒー、ナット、衣服等……。恰もパンドラの箱から出てくるように。箱の上には、「ビルマのテツ・ウイン君へ。貴君の健康

と厚生のために利用して下さい。桑名のS及びMより。」と書いてありました。

私の如き未知の男を援助して下さい。人達は何とまあやさしい親切な方々ではありませんか。此の人達の御厚意や御深情は如何なる言葉を以てしても表現は出来ません。

その日から、私は桑名を訪問し、未知の素晴らしい友人達に会い度いと、その時機の到来するのをひそかに待っていたのです。

今や桑名の未知の友人達を訪問する機会が訪れたのです。私は喜びにはやる気持ちで、桑名へ出発しました。それは長い道中で二時間もかかりましたが、私にはほんの二十分位にしかなりませんでした。と云うのは未知の友人達に会へる喜びに心が一杯になっていたからです。

十一時頃、桑名着。桑名はとても静かな平和な都市です。何でも私が桑名の土を踏んだ最初のビルマ人の事でした。

我々はSさんの家へ行きましました。その家はO洋服店と呼ばれ、母家続きに清潔な美しいお店がありました。そこで私は長い間会話を待ち続けながらも大いに感謝の念を懐いている人に会ったのです。彼は両腕を広げて、ニコニコ微笑みながら歓迎してくれました。私はとても幸せで、その幸せたるや如何なる言葉を以てしても推量出来ません。私は又Mさんや他の日本の友人達に会いましたが、彼等のニコニコ顔や広げた両腕は丁

度、第二次世界大戦の折り彼等がビルマで知己になった、古いビルマの友人を歓迎している様に見えました。

私は此等の人達がビルマへやって来た時は、未だ生れていませんでしたし、従って戦争の体験もありません。併しその日、私は此の人達の顔色や心情から彼等がどんなにビルマ人を愛しているかを窺い知る事が出来ました。そして、私が此の人達のビルマ人に対する愛情を話したり、表現するのは不必要であるとも思いました。何んとなれば、此の人達のビルマ人に対する愛情を表現するに相応しい言葉はありませんから。

此の文章をもって、私は桑名に住むSさんMさん、その他の友人達に厚く御礼申し上げます。そして最後に、私の国、ビルマへ来られる日本の方々を手助けするのが私の役目になる事をお約束致します。

日本、ビルマの友誼がとこしなえにつづくを祈念して。

ビルマの想い出 (二)

「セヤマ・キムラの 想い出話」より

望月とし子



ビルマへの旅立ち

病院では、井戸水を引いて浴場を持っていったが、一般の民家では、共同井戸のまわり集って、ロンギーをまどつたまま水浴びをしていく。ハイビスカスや、ほんのり匂うおしろい花を髪かざりにしたビルマの少女らは、豊かに発達した胸元を、安全ピンで、しっかりとロンギーにまどつけ、楽しみに語らいながら、水浴びをしていた。

その姿は、あざやかな青空の下で、異国情緒あふれた一幅の絵であった。

この土地にも、またイラワディ河をさかのぼったかなり奥深い土地にも、広東人または福建人が、華僑として移住し、日用雑貨を扱う大きな店を開いて成功し繁昌していた。

河の上流に住む生活のゆたかなかれらは、病人が出ると、女医の起佐ひとりの為に、蒸気船をやとって、

「先生、お迎えにありがとうございました。往診お願いします」と、礼をつくして呼びに来たものである。後に、起佐が「バゼイン」に個人病院を開業する時には、信義に厚いかれらが、どれだけ助けて力をかしてくれたか分らない。

往診は、のちにフォードを購入したが、始めのうちは黒塗りの箱馬車で、これをまっ白い馬が引っぱって走った。

——これは高野山の霊苑を観光

用に入る馬車を想像してもらえばよい。

「おばあちゃん、ぼくも馬車に乗るよ。連れてって。連れてって……」

とせがんだものである。

イラワディ河の、あるいは広く、あるいはせまく水路のいりくんだ河にそった部落の往診は、丸木舟のさんばを使ったり、モーターボートを走らせたりした。

このイラワディ河を渡っての往診については、珍しかったり、怖かった話も多いので、後にまたくわしく語りたいと思う。

コレラ患者を助ける

ともかく、これだけ民族のいりまじった病院も、伝染病大発生時には、皆眠るひまも無いほど忙しかった。日本からも、はるばる青年たちを呼びよせ、手足になって働いてもらったが、中でも広江青年は、独学で英語を学び、薬の輸入手続き、税関の仕事、モーターボートの運転など、起佐の雑務をよくやってくれた。

ようやくビルマの生活にも馴れかけた頃、コレラの大流行におそわれた。コレラの治療といつても、その当時は、食塩水の静脈注射をどんどん打って、塩水の脱水状態を救うという原始的なものである。イギリス人の経営する隔離病院は、たちまちに患者があふれ、収容しきれぬ患者を各家庭に往診して廻った。日本で、時に擬似コレラの患者が出た場合の新聞

を読む時、八十五才の起佐女は、「おやおや、凶悪犯人を追うように、大変なことやなあ……」とちらん、これだから日本には、コレラの流行などないんだが……

でも日本広しといえど、私ほどコレラ患者を沢山あつかって治した医者は、いないのところがうかいなあ……」

と苦笑しても、ほこらしいともいえる笑いがこみあげてくる。

この流行時には、日本から蒸溜器をとりよせると、昼もなく夜もなく、保りの者を動かして食塩水の注射液を作りつづけた。これを自動車につみこむと、コレラ患者の家庭を走りまわって、打つというすさまじい毎日だった。

「セヤマ。疲れただよ。もう働けません」

といく度、皆からこぼされたことだろう。

こうしたげいし戦場のような中にも、医者冥利につきるといいうか——胸からこみあげる生きがいなるええ思い出は、いくつが残っている。

中でもあの子を助けた日のことは、忘れられない。

「セヤマ。四つの子供が死にかけている。助けてください。お願いします」

と、頼まれて行った農家の居間には、ぐったりとして、既に生気を失ったような幼児が寝かされていた。

——これはもう、とても駄目だなあ——

と、疲れきった頭の奥で、ため

息をついた。

ふと傍を見ると、若く実直そう  
な夫婦が、合掌して、起佐を一心  
に拜んでいるのだった。

「ともかくこの身体が倒れて  
も、力いっぱい生きてみよう——  
と、太い盛針のような注射針  
を、殆ど肉の落ちて、脱水状態を  
起している幼児の腕に、プスリと  
つきさす。静脈に入った手ごたえ  
がない。あせりながら、腕のあち  
こちにさしてみるが、一向にうま  
く入らない。今なら緊急の場合、  
切開して直ちに必要な薬液注入す  
る技術があるのだが……」

「そうだ。足のものにさして  
みようか——  
最後の手段として、必死に探し  
当てた幼児の足の静脈に、プスリ  
と注射針をさした。透きとおった  
注射液の中に、血液が一筋をひ  
くと、あとは逆流しのようにすう  
とと拡がってゆくのが、ガラス管  
を通して美しかった。幼児の生命  
が、ようやくほほえみ返してくれ  
たように思えて。」

「ああ。やっと食塩水が入っ  
た。これで助けられるかもしれな  
い——  
と、起佐は、誰にともなく、感  
謝の祈りをささげた。

この時である。私の手をおし  
だくと、若い父親が、  
「セヤマ……セヤマ……  
テズマデイセヤマの手は、金  
の手だ」

と、涙を流しながら、いく度も  
言った。

九官鳥ハナとの出会い

ジャングルで拾われた九官鳥  
が、私の手許にやってきたのは、  
確かこの頃だったかと思う。  
ある日、見馴れぬビルマの青年

「タメンサビーピラ」  
と入って来た。

「タメンサビーピラは、食  
事すんだかの意で、あいさつの言  
葉、——  
きつね色に陽にやけた顔には、  
まっ白のターバンが、よく似合っ  
ている。凹んだ二重まぶたの瞳は  
澄んで、なにやらいたずらっぽい  
ほほえみが浮んでいた。

「セヤマ。ジャングルに入ると、  
菩提樹の木かげに、こんな鳥のひ  
なが落ちていただよ。セヤマ。育  
ててみないか……」  
と言う。

「なんの鳥の雛やろう？」  
「さあ。小さくてまだ分らんわ」  
「弱っているなあ。死にかけて  
いるのと、違うか」  
「いや。大丈夫。大丈夫。」

殺生を極端に嫌う仏教国ビルマ  
では、どんな生物の命も大事にあ  
つかった。素足に緑色のロンギー  
をまとったこの青年も、鳥の雛を  
大事な宝物のように、掌にのせて  
いた。

ハナは、こうした形で、起佐の  
手許に引きとられたのである。も  
っともその時は、羽毛も生え揃わ  
ず、うす鼠色の綿くずを丸めたよ  
うなもので、どんな鳥に成長する  
か、見当もつかなかった。  
うすい膜をはった眼は、じっと  
閉じたままである。小さくやわら

かいお腹が、ピクピクと、僅かに  
波うっている。そっとさわってみ  
ると、なま暖い感触は、生への願  
いを、起佐に囁きかけているよう  
に思えた。

ベットのほしに綿をしき、小さ  
な寝床をつくってやると、その上  
に静かにのせてやる。

「さて。さて。いったい何を食  
べさせたものだろう」

起佐は、手許においであったビ  
スケツト——ゴルフデンパーフ  
ーを、柔かく柔かくかみ砕くと、  
スプーンにのせて、口をこじ開け  
そそぎいれてやった。

「おや。食べる——  
二口、三口入れると、またぐっ  
たりとした。やがて、日に日に食  
欲の出た雛は、黒く柔かい羽毛が  
生え揃い、九官鳥らしい姿をとど  
のえて来た。毎日水浴びさせてい  
るうちに、黒い翅は、濡羽色に光  
り、黄色の首すじの毛は、くつき  
りと輪をかけたように浮びあがっ  
てきた。嘴は、ひととき鮮やかな口  
紅色をおびてきた。

ハナ。ハナと呼ぶと、小首をか  
しげ羽をバタバタ動かして甘えか  
ける。  
ある日往診から帰ると、看護婦  
がとんで来て、  
「セヤマ。九官鳥が、ハナ。ハナ  
としゃべり始めましたよ」  
「どれ、どれ、ほんまかいな……」  
と、とるものもとりあえず、鳥  
籠のそばに走りよった。たしかに  
ハナ。ハナ。  
と、すこしにこった声で、盛に  
しゃべっている。

その後の会話の修得は、めざま  
しいものがあつた。英語、ビルマ  
語、日本語と、皆が面白がつて教  
える言葉で、次から次へと覚えて  
ゆく。中でも  
—— モシ モシ カメヨ。カメ  
サンヨ——  
の童謡は、皆の人気のまどだつ  
た。

このハナのおしゃべりが、往診  
から疲れて帰る私を、どれだけ癒  
めてくれたのだろうか。

あの九官鳥は、仲間うちでも、  
とびぬけ上等の頭の持主だったに  
ちがいないと、今でも思ってい  
る。  
どんな時間に帰っても、必ず  
起佐の足音は聞き分けて、  
—— オカエリナサイ。オカエリ  
ナサイ——  
と大喜びをする。

それはまるで、血の通いあつた  
子供のようなだった。いや、実子を  
持たぬ起佐女には、それ以上の確  
かさのようにさえ、思われる毎日  
だった。  
こうして、ハナに語りかけなが  
ら、起佐は、ビルマの生活にとけ  
こんでいった。病院の仕事は、拡  
がる一方で、日本から医師の養子  
夫婦を呼びよせると、分院の経営  
をまかせた。  
ラングーンで生れた孫たちは、  
一人ずつにインド人の子守りがつ  
き、学齢期になると、居留民のた  
めの日本人学校に通った。  
今はもう三人の子どもの良いお  
母さんになっている孫娘に  
「あんた、ラングーン的生活覚

えているかい」  
とたずねると、  
「ぼんやりと、覚えてるわ。  
ねえ、お兄ちゃん。雨期に入って  
家の前に出来たため池で、魚つ  
たんと、ちがう？」

「そや。そや。それに僕は、ス  
コールが余りひどくて、馬がすべ  
って転んだのも、かすかに覚えて  
いるわ」  
と、兄弟でなつかしうに話し  
合っている。

嫁のはる子は、バゼインとラン  
グーンの病院を、度々往来して  
は、起佐の仕事をいろいろ手伝っ  
た。元來器用なたちの彼女は、原  
地人の好む料理も覚え、イギリス  
人経営の服地屋で、絹の布を賣う  
と、家中の洋服を、涼しそうに手  
際よく仕上げた。  
「おばあちゃん。暑くて食が進  
まないのて久しぶりに、ガッピ  
つくりましようか」  
「そうやな。あれを食べると、  
本当に食がすすむなあ」  
と、ビルマの料理を、今でも作  
ってくれることがある。

こうして生活を続けていくうち、  
起佐は九官鳥ハナと一緒に、ビル  
マに一生住むつもりになつてい  
た。  
ところが、昭和十四年、支那事  
変が起きた頃から、イギリス統治  
国ビルマにも、少しずつ不穏な空  
気がただよってきた。  
やがて、  
—— 日本人はひとまず引きあげる  
ように——の命令が出たのは昭和  
十五年のことだった。引きあげる

と、おばあちゃん。暑くて食が進  
まないのて久しぶりに、ガッピ  
つくりましようか」  
「そうやな。あれを食べると、  
本当に食がすすむなあ」  
と、ビルマの料理を、今でも作  
ってくれることがある。

前に船長の厚意で、ミシンを始め必要な家具の一部を日本に送ってもらった。ビルマの国はチーク材が豊富なので、貨物の囲いの板にこれを使い、後にいろいろの家具を作らせて重宝したものである。引きあげに当って、最も悩んだのは、かけがえの無いペット、九官鳥、ハナのことであった。

「ハナ……元気で長生きしなさいよ。」  
起佐は、いく度も声をかけると、涙をぬぐった。

ハナも霧困気で、別れが分るのだらうか、しょんぼりと小首をかしげると、円くつややかな瞳をこらして、じっと起佐の顔を見つめていた。

「ハナ、分るかい。最後のビスケットだよ。おあがり。沢山おあがりよ。」  
と掌にのせてやるが、好物のゴールデンパーフも、いつも程喜ばない。

看護婦に、この箱を十分にあずけると、後髪をひかれる思いで、病院を出た。

日本に着いて落着いたと思う時、ビルマの病院からといた手紙に  
「セヤマ、本当に申しわけありません。セヤマの帰られた後、いくら好物のビスケットをやっても、

一口も食べようとしないので、だんだん弱って、とうとう飢え死にしてしまいましたよ。かわいそうに。ハナはセヤマの子供かと思っていたのではないのでしょうか。」  
と、看護婦はむすんでいた。

起佐は、いく度も読み返して、涙が滂沱としてとどまることを知らなかった。

たどえ船の中で死んでも良い、なんて抱いて、かくし持ってでも連れて帰らなかつたらうか……いつかビルマの思い出に、果てしもなく引きこまれてゆくと、起佐の心も、身体も、柔かにとけてゆくようだった。その時、  
オバアチャン デンワ  
オバアチャン デンワ

### ビルマ情報

#### 東南アジア諸国等の大洪水

東南アジア諸国、インド亜大陸では、八月に入ってから台風が立て続けに上陸し、集中豪雨に依り河川が氾濫、家屋が流出、田畑が冠水、農産物の被害は拡大する一方で、その上天然痘やコレラが猖獗を極めています。

八月廿三日付ジャバンプタイムスは、ラングーン発AP電としてビルマの水害に就き、左記の通り伝えていきます。

水曜日この当局発表の数字に依ると、世紀最悪の洪水のため十八人が死亡、二百万人が家を失い、一千万ドル以上の被害を蒙った。

水災地区は全土の十一パーセントに当る、三万平方メートルに及び、ビルマの十四州、管区の内僅か二州、管区が災害を免れた。

原因は雨量の増大した河川の堤防が決壊したためである。最悪の打撃を蒙った地区は、ビルマの主要河川、イラワジ河の沿岸地区で首都ラングーンの北方百二十八軒二百四十軒間である。

此の模様就て、帰国研修生ウ・イエ・トウから森林事宛次の様な便りがきています。  
「今、ラングーンでは殆んど毎日大雨が降りつづいています。マンダレーやブroom地区では大洪水が起り、多数の人々が難儀にあっています。併し二、三週間もすれば洪水も治まり、元通り静かになるでしょう。」  
尚お、日本政府では、八月廿七日ビルマ国に対し、金二万ドルの緊急援助を行いました。(保科記)

#### 邦人を含む全員釈放

#### 漁業調査船「チャンギ号」事件

九号会報にてお知らせした「日本人漁業指導者に実刑」に関する詳しい情報、九号会報原稿のメ

切り後入りましたので、後ら馳せながらお知らせします。  
外務省は六月廿三日、此の四月以来領海を侵犯した廉でビルマに抑留されていた東南アジア漁業開発センターの調査船「チャンギ号」の船長以下三十一名(内日本人六人)が、全員釈放される事になったと発表しました。

此の釈放はビルマ国政府からの通知に依ると、同国政府の「関係各国との友好関係維持」に対する特別配慮からであり、その結果全員執行猶予として釈放されたものです。

当初日本政府は国際機関や外交ルートを通じて、ビルマ政府に日本人六人の保釈を要請していたのですが、ビルマ側は「司法権の独立」を立て前に純然たる領海侵犯事件として取り扱ふ意志表示をしており、早期釈放は困難視されてきました。

所が六月十五日、ASEAN三国等の親善訪問から帰国した許りのネウイン大統領の高度の政治的判断から、同大統領の「鶴の一声」で早期釈放が決定されました。

同大統領が此の裁断を下した背景には、(一)「チャンギ号」は漁業資源調査のための国際船である。(二)同船の船籍国「シンガポール」を始め、日本、タイ、フィリピンは何れも友好関係にあり、此等の国が早期釈放を働きかけた。(三)特に日本の場合、田中首相が今秋同国を訪問する等の諸要因があり、これ等のことが、大統領に早

期釈放を促したものとみられます。(保科記)

#### ビルマ族の遺品盗まれる

#### 流出する東南アジアの文化財

一九六七年のある夜、ビルマのタレキッタラという古代都市に近いモウザ美術館に、一人の賊が侵入した。賊は他の財宝には目もくれず、ほんの一週間に発掘されたばかりの小さな五体の青銅像へと直行した。

ビユー族の青銅像として知られる、四人の楽士とこびとの踊り子この群像は、ビルマの考古学界にとって一大朗報になっていたものだった。ビユー族というのは、チベット・ビルマ語系諸族に属し、五世紀から九世紀にかけてタレキッタラに町をつくって、そこを統治していた民族である。彼等はその後ビルマ人と交わり合い、そして多くの謎を秘めた文化的足跡を残したのだった。発掘された五体の青銅像は、此のビユー族の姿かたちをありありと示す最初の手がかりとも云うべきものだったのである。

賊は余程、慌てていたとみえて、四体の楽士像だけを持ち去り、踊り子の像は残していった。そして、ビユー族と同じ様に、何んの痕跡も残さずに消え去ってしまったのである。此の盗難があったから九ヶ月後の事、あるアメリカの美術館の発行した刊行物の中になんと此の楽士像の写真が載っ

ていたのだ。ビルマから地球を半周もした所にある此の美術館は、数多くの美術商や美術品収集家と取り引きもあり、特にビルマの美術品収集で知られている。当の美術館は、上述の青銅像を所有している事を否定し、写真の出所は匿名という事になっていった。此の謎は今日依然として解けていないとの事である。

此の様な文化財の不法持出しや、盗難事件は、最近十年間、東南アジアの文化に対する先進諸国の関心が高まるにつれて激増しており、その被害物件は枚挙に暇ない位である。

従って、東南アジア諸国の美術館や文化局は、自国の文化財の流出防止に懸命なる努力を続けているが、資金不足のため、抜本的対策は講ぜられず、弱り切っているのが現状である。(註、タレキッタラは現在のプロローム地区にあった都市。リーダスダイヂェスト)

空中事故

ビルマ政府筋が七月九日発表したところによると、ビルマ空軍機五機が六日ラングーン北東一九二キロのシュワジン町近辺の山に墜落、乗員十人が死亡した。同筋によると、墜落したのは五機ともT33ジェット練習機で、悪天候のため五機一団となって山腹に激突したという。このさい少佐四人、大尉六人が死亡したが、これはビルマ空軍史上最悪の事故で

ある。昨年八月には同じT33ジェット練習機が離陸直後に墜落して乗員二人が死亡している。(産経)

「ビルマ文学案内」完結

一九六八年から出版が開始されたマリカ「ビルマ文学案内」がこの度ようやく完結した。ビルマの古典文学についてはウー・ペー・マウンテンに「ビルマ文学史」の名著があり、入門書、概説書として多くの人に親しまれてきた。しかし現代文学に関する本格的な概説書は、残念なことにも今までなかった。もちろんごく簡単な紹介書の類は何種類も出されているが、取り扱った作品の教からいうとこのマリカの案内書に匹敵するものはひとつもない。

「ビルマ文学案内」は全五巻からなる。紹介された作品の数は第一巻から第三巻までがそれぞれ二十四編、第四巻が十三編、第五巻は十五編で、総計百編である。王朝時代の作品五編を別とすれば、すべて二十世紀の作品ばかり。作家一人につき作品一編ずつに限定されているから、この本ではビルマの作家百人の代表作が紹介されていることになる。案内という題からもわかるように、この本はビルマ現代文学の手引書である。

作家と作品の選択の仕方に若干の異論はあるが、ここで紹介された百編こそ二十世紀のビルマ文学を代表する作品だといってもよいであろう。

その百編とも、作品内容の紹介(抜粋)と作品および作者に関する解説とから成っている。作品の解釈について著者の主観が前面に強く押し出されているので、紹介というより評論的な性格が強いが、解説部分では、ほかにどのような作品があるかということも紹介されている読者の理解を助ける。

マリカというのは、作家ミンチーと詩人ナツエとの合同ペンネーム。ともに一九三三年生まれで、近代的教養を身につけ外国文学にも明るい気鋭の二人である。(産経)

創立十周年を迎える

ラングーン日本人学校

ラングーン日本人学校は本年創立十周年を迎えました。同校は、一九六四年六月、全日制日本人学校として正式に発足したもので、これは現在海外全日制日本人学校三十三校の内、バンコック、ニューデリーと共に最も古い歴史をもつとの事です。創立以来十年の間、不十分な施設、教材それにビルマという特殊な環境の中で、不自由な思いをしながらも先生方、生徒諸君の父兄それに大使館員の方々が一致団結、あらゆる困難を克服して今日まで存続、発展せしめられた御尽力、御努力に對し更めて深甚の敬意を表する次第です。幼年時代をビルマで過ごされた

方々は、すべてビルマを第二の故郷として恩慕し、敬愛されていますが、それが今後の両国の親善、友好促進に大いに寄与し貢献するものと信じて疑いません。今般、同校の同窓会が中心となつて、十周年記念文集を刊行されましたので、その中かな作品を若干ピックアップして、左に転載させていただきます。(保科記)

岡野 篤子

私は、十三年前、ビルマで生まれ、一年半の日本で過ごした間を差し引く十年余の間ビルマで育ったのですから、ビルマは私にとつてふるさとのようなものです。ふり返ってみますと、十年間という長い時間も、アツという間に過ぎてしまいました。

ビルマでの楽しかった思い出の一つ一つは今でも、ハッキリとまされて昨日の出来事のように思い出されてきます。学校よりの遠足、文化祭、運動会、家族で出かけたきれいなサンドウエイの海辺、それにバガンやマンダレーへ旅行等々。

ビルマで楽しい日々を過ごせたのは、親切にしていただいた皆さんのお蔭で、出来る事ならもう一度ビルマへ帰って、皆さんと一緒に勉強したり、お話ししたりし度いです。

今年の八月、東京でのラングーン日本人学校同窓会には出席出来ませんでした。来年はきっと参

加する積りです。

ビルマに就て知っている日本人は、本当に少なくビルマがとてまあ素晴らしい所だという事は日本人々に教えてあげたいと思ひ、学校の友達にも色々話してきかせています。でも、友達はそれぞれ自分の生れた所、育った所も素晴らしいと色々な話をしてくれます。きつと、人間は自分の生れ育った所が、一番よいと思うのかも知れませんが、私は何れ、いつかきつと、再びビルマを訪れ、思い出多い学校を始め、出来ればサンドウエイまで足を伸ばしてみたいと共に、私にとつても親切にしてくれたナニーや他のビルマの人々にも会つて心からお礼を云うつもりです。

ビルマと自動車

込茶 誠

ぼくたちの生活は自動車と非常に強く結びついて、下校はスクールバス。友だちの家に遊びに行く時も自家用車だ。われながら、たいした身分だと思つている。もし自動車が無ければ、生活はずいぶんせまらられ本当にたんへんだろう。ぼくの家の自動車は、マツダIIルーチェといひ、もうだいたい古いです。でも、ぼくはこの自動車が大好きだ。たぶん一年間もこの自動車で登校したり、友だちの家に遊びに行



ったりしたからだろう。

この自動車にのると、どこの自動車にのってよりも安心だ。色は白だけど、黒も好きだ。

それはビルマの大臣の自動車だ。だいたい黒なので、もし黒色の自動車だと自分も大臣になった気になるのではないかと思うからだ。

ビルマ製のバスは、だいたい色は赤と緑と青い黄で、木製だ。そして古めかしい。もう二十年以上も動いているのも多いそうだ。

窓も木でできていて、すき間もある。雨の時は、不便だろう。これはビルマにあまりガラスがないかららしい。

前にクラッシュカークのボディと屋根をとったような自動車を見たことがある。

バスにしろ、屋根なしの自動車にしろ、かなり手工業が入っているというのをきいて本当におどろいた。こんな大きなものをよく手工業でやると思う。ビルマの人は手先も器用だし、発明工夫もよくするのだと思う。

ぼくはオートメーションできちんとできた自動車でない不安だ。けれど、ビルマの人はビルマの自動車に心地よさそうにのっている。日本人とはいろいろな点でちがうなあと感じた。

ビルマの女性

佐久間千恵

古来ビルマは、インド仏教文化の強い影響を受けてきたが、幸いそのヒンズー文化の影響は殆んど

受けていない。

このため、インドのような女性隔離乃至蔑視の風習は全くみられない。王朝時代から完全な男女平等思想が行きわたっており、著名な女性裁判官、作家、思想家、行政官が輩出している。「女が男に劣る点は大だ一つ、仏陀になれないことだけである。」(南方仏教に依ると、男だけが仏陀になる資格があるとされている。)と云われている程である。

金銭、離婚、相続、商取引等の重要問題に就ては、男女の差は全くない。商店の看板に夫婦の名が並べて書いてあるのは珍らしいことではなく、また所謂「バザー」の商店主の大半は婦人であり、寧ろ男を凌ぐ程商売熱心で、商売上手である。親から結婚を強いられ、泣く泣く嫁いでゆく事なども、先づみられない。

食糧が豊かで、食べるに困ることのない国だけに、親の反対する相手といとも簡単に、手に手をとって墮落ちをしてしまう。結婚してからも、嫁ぐとき持参した金品はもとより結婚生活中に稼いだ品物の半分は持って帰る権利がある。で、いやになればあっさり離婚する。

夫が死んだ後、一家の長となるのは長男ではなく、未亡人である。「ビルマ女性は、世界で最も高度の自由と独立を享受している。」とビルマの人が自慢するのも当然である。

要するに国が豊かである上に、女性が稼ぐ能力をもち、一家の財

布をガッチリ握っていること。つまり経済上の実権をもっているからこそ、男女同権が実現していると云えられた、此の点、上から押し付けられた男女同権とは趣きを異にする。

女の権利が強いとは云うものの、そこは保守的な国であるので、夫に威張りちらすことをもって男女同権なりと考へるようなこととはない。

一家の長としての夫を敬い、愛情をもって仕えるのが女の美德とされている。他人の前で夫をたてようと気を配っている姿には、いつも感心させられたものでした。

女性がよく働き、而も夫を大事にしてくれるビルマを、男の天国か。といつては、言い過ぎでしょうか。

大阪外大支部結成さる

ビルマ語科を設置している唯一の大学である大阪外大のビルマ語科の学生達は、總てより当協会の運動方針に全面的に賛同、共鳴していました。今般原田教授の壮入りで支部結成の運びに至りました。

六月廿四日(月)、本部より酒井副会長、塔本、保科両常任理事が大阪外大ビルマ語科教室へ出向き、原田教授同席の下に、当協会設立の目的、現況、今後の運動方針等に就き、質疑応答を交えながら詳細に説明、同日付をもって支部設立が内定致しました。

新らしい酒は新らしい草袋に盛

らなければならぬし、此れを契機我々に高令者の陥り勝ちな硬直の思考方法に反省を加へ、生新激刺の気風を導入致し度いものです。

ちなみに、当日決定した当支部の役員は左記の通りです。

- 支部長 平木洗二(三年)
- 副支部長 重富勝己(三年)
- 主 務 辻 和 昭(二年)
- 外 渉 鎌 仲 雄 二(二年)
- 西 野 隆 一(二年)
- 岩 崎 哲 也(二年)
- 会 計 加 藤 陽 子(二年)
- (会員教(発足時) 三十三名)

爽やかな釈迦の国

関東支部 藤塚晴夫

ビルマは詩情あふれる国だった。美しい自然、親切だった人々、多くのパゴダを初めとする豊富な文化財、それが一体となつて今も私の身体の中に鮮烈なうすきを残している。それは入国前に私が見たカラー写真茶色のイラワジ川、うすよこれたパゴダ、貧しそうな人々のくらしの印象を一八〇度転換させのを改めて思い出させてくれた。それらは、「鎖国」

「陸の孤島」「日本が第二次世界大戦の舞台とした国」といったイメージを払拭し、実に明るいそして清潔な国として、私に忘れえぬ印象を与えてくれた。

私のビルマ旅行の最初の目的地はランゲーンからベゲー。まず、

案内書によれば世界の驚異の一つと書かれるシュエダゴン・パゴダに行く。二五〇〇年以上前に最初の基礎が置かれ、その後十五世紀ごろ現在あるような一〇七メートルの高さに作り直されたといわれるこのパゴダは、私が数多く見たパゴダのうちで最も荘厳で、大きなものであった。市の中心地にはスレー・パゴダがあり、釈迦の遺髪が祀られているといわれる。市はパゴダを中心に整然と区画され、緑の多い落ち着いた町であった。

ベゲーはビルマ巡礼の一中心地となつている町で、シュエモード・パゴダと涅槃仏シュエタリヤウンがある。シュエモード・パゴダは釈迦の遺髪と歯が祀られていると伝えられている。シュエタリヤウンは日本人には「寝釈迦」「寝仏」として知られている。静かな田園に開かれた町とパゴダ、そして寝釈迦はやや唐突に私の前に現われ、その前で祈りをささげる女性の姿は静けさの中にどけこみ、カメラのシャッターの音さえ異様にひびくほどであった。

日が西に傾く中を再びランゲーンへ向かう道は田園の一直線に続き、今見てきた寝釈迦のイメージと共に、ビルマに旅をしているという気持を強く私に与えた。疲れた体には、ビルマで唯一のマンドレー・ピールの酔いが気持ちよく、早々に床についた。

翌朝、数多くのパゴダがあるパガンに向う。パガンはパガン王朝の遺跡が至るところに残る。ツ

リスト・バーマのパンフレットによれば、パゴダは四〇〇万の数を数えるというが、実際、非常に数が多いことは確かである。空港でジープに乗り込み、まずポバ山に向かう。ポバ山までは、たいへんなほり道で私のカメラの中にまで侵入するほど細かい砂が私を悩ませた。しかし、水くみをする人、牛車を休ませている人、やしの木の点在する野原など展開する風景はビルマらしい落ち着いた美しい田園であった。ポバ山は変わった形をした火山で、その頂上には寺院が建てられ聖域として知られる。パガンにとって返しイラワジ川の夕陽を見る。全てのものが赤くそまり一日の仕事を終えた牛が気持よさそうに水浴をしている。棧橋には舟がつながれ、また渡し舟が水の面にうかがひ一幅の名画を見るおもいであった。

パガンの町はいつも何となくほこりっぽい感じで、中心街といってもどこがそれだかは判然としないうが、数多くのパゴダの間に家々が点在しているという印象をさええうける。パガンの遺跡の中で最も有名なのは十一世紀に建てられたといわれるアーナンド寺院、パガンの寺院の中では一番高いタピニニ寺院、ガドバリン寺院は典型的なビルマ式寺院、小さくて美しくかわいしいシエウジー寺院など、その他実に無数のパゴダがある。これらを実て人々の財力、信仰心、努力というものには無条件に頭のさがる思いがするし、また、くずれかけたパゴダな

どをみると栄枯盛衰の人の歴史を思わずにはいられない。  
朝、今日太陽はビルマの空に明るくかきやき、マンダレーに向かう。空港で化粧をした女の子に出会う。化粧といつてもタナッカードよばれる植物の汁を顔や腕に塗ったものである。  
ビルマ第二の都市、マンダレーにビルマ航空(BAC)のフレンドシップで向こう。隣席に座ったアメリカ人は、日本で広告関係の仕事をしていて休暇でビルマ旅行をしているという。スケジュールは殆んど同じなので同行することに意気投合する。飛行機の窓から第二次世界大戦の激戦で有名なアバの鉄橋が見える。マンダレーに到着し、荷物を宿舎に置くのもそこそこアメリカ人と共にサガインに向かう。約一時間ほどで先刻機上から見たアバの鉄橋に到着。鉄橋を渡り、日本人には「おっぱいパゴダ」の名で親しまれているカウナムドール・パゴダに着く。巨大なお椀を伏せたような珍しい形をしたパゴダである。真青な空に真白いパゴダが映える。美しいビルマのまさにビルマらしい風景である。次にイラワジ川にそって立つボンヤン寺院を舟のついでに見学する。太陽はさんさんとふりそそぎ、寺院は悠久の時の流れを知らぬげにそそり立ち、岸辺の緑は春眠をむさぼるその中で私達の乗った舟と、川辺で水浴をする尼僧だけが空気がかきみだす。同行したアメリカ人がつぶやいた言葉「パーフェクト。」まさにそれは、

ユートピアもかくやと思わせる所であった。  
翌日はメイミョウに行く。日本の軽井沢に似た所で桜並木が印象的であった。町のはずれにある植物園でシャン美人と出逢う。「写真をとらせてくれないか」と声をかける。少しはかんだあと「どうぞ」と承諾してくれぬ。池のほとりの桜の咲く下で、日傘をさしたシャン美人の写真をとる。昨日からの感激は、私の身体がビルマにあつて現実のものなのか、それとも夢の中をさまよっているのか、わからなくしてしまふようであった。  
マンダレー市内では、マンダレー市街の見晴台、マンダレーヒルと王宮を訪ねる。王宮内は軍の施設であり見るべきものも少ないが、世界大戦当時の遺物でもあつた。昔の激しい戦いを忘れたかの様にビルマの空と緑にとけこんで置かれてあつた。マンダレーでは日本からの慰霊団の人々にも出逢つた。ビルマの明るい風土と慰霊団の印象とはかなりちがはくてもあつた。  
夕食はいつものごとく中華料理。とにかくこの町へいって中華料理屋はあり、それがどこでも結構うまい。わざわざビルマへ行つて中華料理でもないと思つてはみたが、結局最後まで純粹のビルマ料理は食はずじまいであつた。  
あくる日はビルマの水郷地帯、インレー湖に向かいます。タウンジ

ーに宿をとる。マケットを見学に行く。そこでは日本製の練歯磨がヤミで八〇〇円で売られているのが異様に目についた。  
インレー湖は空と水が一体になり、そこに住む人々をやさしく包んでシャン高原の中央にあつた。あしの間を無数の水路が走り、浮島の上の人々は農耕を営み、湖上には世界でもここでしか見られないという足こぎの舟を浮かべて、大きな円錐形の竹かごで漁業を営む人々の姿があつた。それらは必死に生活を営む人々の姿であるにちがいないが、私にとっては非常に速い世界の出来事のようにゆつたりとした姿で、私の乗った船外機つきのボートのあわたたしさとあまりにも対照的であつた。  
長いようで短かつたビルマ旅行も最後である。明日はランゲーンを出発して国外に出なければならぬ。ランゲーンへ向かうためホの飛行場へ急ぐ。ホの飛行場は夕闇がせまり、何となく人こいしさを誘う旅の終りである。飛行場駐在のビルマ軍隊の人達と言葉交わす。持っている機関銃が珍しいから見せてくれる。飛行場に沈む夕陽は私のビルマ旅行の終りをつげるかのように輝く朱色のきらめきを残して山の端に沈んでいった。  
旅は私の心について何かを残してくれるが、ビルマ旅行は私に本当の豊かさというものは何なのかというのを教えてくれた。人々の生活は決して物質的には豊かではないが、その心は実に豊かであつた。それはこの国の男子が一生に一度は、仏門に入らなければいけないというような宗教的な戒律の影響と、自然と共にでなければ生きてゆけない環境のためかとも思える。  
ビルマもまた、国土の開発、工業生産の活発化への道を歩むのだろうが、物心両面の調和のとれた発展を願うのは、ビルマを旅行し、ビルマに愛着をもつた誰れもが願うことであろう。衣食足らないでも礼節を守る人々に私には驚きであつたし、ビルマの国土の美しさは私を魅了してやまない。  
またいつの日にかビルマを訪ずれる時、人々の生活が物質的に少しでも豊かになっていることを願うと共に、あの純朴な人々と自然に出会えることが私の楽しみである。(筆者はカメラマン)

パガンの想い出

東海支部 永坂三夫

本年一月、三十年振りビルマへ行く前、旅程の中に僅か半日ではあるがパガン見学が予定されていたので、パガンの歴史について、若干の予備知識を得ようと文献を探したが、吾々に格好なものは入手出来なかつた。私のパガンに就いてのそれまでの知識は、大野氏の『ビルマ語の話し方』からと、世界文化地理大系とが世界美術全集などの東南アジア編から得た断片的なもの以外にはなかつた。

た。そのうちに岩内健二氏から HARVEY と HTIN AUNG の「ビルマ史」を借用するものができたが、出発まで幾日もなく、HTIN AUNG のビルマ史をバガン王朝の滅亡まで目を通すのがやっとで、ここまでの知識で出かけてしまった。

バガンに向ってラングーンを出発する朝、ミンガラドン空港の売店 PICTORICAL GUIDE TO PAGAN を見つけた。約五〇頁の大部分が写真ではあるが、機内から地上の偵察もしなければならず、一時間半の飛行中にはとても私の語学では読みきれない。バガンに着いて最初に訪れた寺院チロミンロと云う名を探し出すのが一杯と云う有様で、ただアーナンダ寺院のチャンシッタ王とシン・アラハンの像を見るの一点だけが目標であった。

「……。仏教は決して厭世的な宗教ではなかった。ビルマ史上、最も偉大な時代のビルマ人が、彼等の宗教の理想の故に生々とした精神を持ち、勝利の真只中であっても彼等の生活上の外観はおだやかなものであったと云う事実が、これを雄弁に物語っている。バガンが身に付けた種々かある精神は、今日もバガンのアーナンダ寺院に見られるチャンシッタ王と大司教シン・アラハンの像を彫った、無名の彫刻家によって記録され、再現されている。ビルマ人をつつくた此等二人の人は、八百年以上もの長い間、巨大な仏陀の立像を見上げ、無限の憐れみを求

めて合掌し、おだやかに、信じきって膝まづいて来た。」  
とティン・アウン氏は述べている。確かに二人の、巨大な仏陀の金色の立像の前に跪き合掌している小さな像は、ヨーロッパの都市の広場に立ついかめしい、勝ち誇った国王の武人像とは似てもつかない。此処に仏教徒の、ビルマの姿を見た。

その後訪れたマンダレーで、博物館長のドーティン・フラーから王城内外の案内を受け、色々説明を聞いたが、英語の理解力が弱いな上に、コンバウン朝の末期までは勉強していなかったために、残念乍らよくわからなかった。マンダレーの博物館で HISTORICAL SITES IN BURMA と云うビルマ文化省発行の本を見つけ、ラングーンの某書店で売っているとのこと、結局はシェ・エ・ダゴン・パゴダの売店で入手出来たが、それはビルマを離れた前日の午後であった。約一五〇頁A4判で一〇チャットはまことに廉価である。

帰国後、何の知識もなく出かけたのではあるが、しかしこの目で見、スケッチし、写真もとって来た印象や記録をもとに、此等の向うで求めた案内書と、アーナンダ寺院のあの賑やかな売店で求めた一寸まづい絵葉書々々をもとに、バガンの再現を試みるにつけ、僅か半日程のために或いは思っても果せなかつたかも知れないが、尚見ること多々あったことを知って、残念至極、まことにほぞを噛み思ひです。

ミンガラドンを出発する時、F. V. JUSTIG と云うラトビアの仏教僧で桂冠詩人の「揺れる木の葉」と云う詩集を見つけた。その中の「バガンの日の出」を紹介します。訳は東海女子短大教授浅野正徳氏に依頼しました。

バガンの日の出

日の出だ、日の出だノ明けそめ  
一日の門出に、心は躍る。  
古都バガンに、いま陽は輝やく  
宇宙の詩にふさわしき景観。

バガンよバガンノ驚異の国土  
栄光の居所、名利のまち。  
わが眼は霞み、彼方にさ迷う、  
お前は消えゆく炎のごとく、  
終りを告げた。

大空の穹隆はもはや、あの  
紅色もなく、赤い縞模様もなく  
陽光は刻々と強まり  
大地は鉛なす蒼色を帯びる。

古き大通りを行く雄牛たちは  
ゆるやかに水敷が車を曳く。  
右手にみる一筋の埃りばい間道  
は  
かつてチャンシッタ王の魔法の  
槍得しところ。

私はここにみる、歌ひあけるに  
余りにも驚嘆すべき堂塔を。  
右と左に眼を凝らせば  
古き梵鐘の音を聞く。  
誰か祈る、欲望を斥け、

み仏に礼拝を捧げて  
そして私に？私には帰依の生活に  
胸ふくらむ己れを夢みる。  
帰依の心は仏陀のみ教え、  
信仰、功德、慈悲、自戒。  
み仏の、み弟子等に説き給うと  
ころ  
衆生みなを悟りに導き給う。

バガンの王はみな智ありて、  
道を説きて信仰をすすめ、  
人々の向上をはかる必要を知り  
ビルマ民族を賢明に統治せり。

バガンよ、私は讃えたい  
私の知るすべての言葉を尽して  
その魅力こそは何人も言葉で言  
い尽せぬ、  
何人も心躍らずにはおられない  
埃にまみれ、また朝霧に包まれ  
ても

バガンは私にとり常に生きてい  
る。  
それはまこと、すべての驚異の  
地に冠絶し  
私は我が生命にもましてバガン  
を愛する。

一九六六年九月廿六日  
(筆者は鳴海病院副院長)  
~~~~~  
キユウシユウ・トリップ

大外大研修生  
ウ・キン・モン・ウイン  
暑中休暇に、私は九州と北海道  
を訪れましたが時折り想ひ出して  
みたい場所は、九州の阿蘇とヤマ

ナミハイウエイ、それに北海道の  
稚内公園です。  
七月十九日より廿五日までの旅  
行には我々八人のビルマ研修生、  
文化協会の笹木さんと北九州、  
長崎、熊本、阿蘇、別府、江田島  
それに広島へ訪れましたが、神戸  
から北九州へはフェリボートで渡  
り、その時は文化協会の酒井さん  
にも付添っていたのだ。



江田島に於ける一行

北九州の協会の方々は我々を親  
切にもてなして下さり、市役所、  
ビルマの「平和パゴダ」、関門橋、  
下関水族館、朝日新聞社へ案内し  
て下さった。フェリボートの上か  
ら関門橋と港が見えたと同時に、  
北九州が一目で見えて感銘を受け  
た。

「平和パゴダ」を見てビルマを  
想い出しそしてビルマのお坊さん  
にお会して拝跪出来た時は大変嬉  
しく、心に寛ぎを覚えた。平和パ  
ゴダ内で我々一同お坊さんに拝跪  
した。「平和パゴダ」周辺の景色

は素晴しく、アジヤ最大の吊橋——関門橋のすぐ側に在る仏塔が金色燦然と輝いているのを見て大変楽しかった。我々の小さなバスは海底トンネルを通過して、下関へ行き、帰りは関門橋を通過して戻った。我々は関門橋を渡りながら平和パゴダを見る事が出来るのが分って大変嬉しかった。

七月廿日の夜には北九州の協会の方々が、夕食会を催して下さいが、その席上座敷バガンに佇む、「還らぬ戦友よ」という歌を傾聴する機会にも恵まれ、大変楽しく温いおもてなしに感謝する次第です。

翌日、汽車で長崎を訪れ、そこでは、グローパー邸と平和公園へ行つた。「ニューヒノクニヤホテルの辺りを彷徨している内に夜になったが少し前の夕方頃は、天気の良い合と云い、街頭風景と云い、宛らラングーンに居るが如く感じました。我々はお互いにその雰囲気について語り合った次第です。

翌日、バスで阿蘇へ行つたが、熊本郊外で樹木や農場を見た時、又々ビルマ国内で旅行している様なムードになった。又阿蘇山を見て妙な気持ちになった。灰褐色の巨大な噴煙、黒いけわしい絶壁そして凄しい煙を背に佇むちつぽけな人間を見て私は「自然の美」を感じ得た。

ヤマナミハイウェイを通過して阿蘇から別府へのバス旅行は私にとって九州旅行中の最も興味深く感じたものであった。そのハイウェイはジグザグ状に丘陵地帯を貫通

し、時には山岳地区を、時には深谷を、時には高原地帯を、通過し時には山を登り、時には山を下りた。山の頂上から俯瞰される緑の樹木で蔽われた山々、靑空の葎倉地帯、全土を蔽っている緑の色をも住民は殆んど見ない……此等を見ては羨望な気持ちになった。

別府では温泉に入り、廿四日の午後汽車で広島へ向つた。九州入をした時からズット我々に付添えていてくれた、英語の出来る日本人学生トム君(林田君のニックネーム)は、小倉で下車、入れ替り宮原氏、波多野氏、鳴川氏、奥川氏が乗車、我々に付き添っていただいた。その夜は、江田島の第一術科学校のゲストハウスに投宿したが江田島訪問の段取りは、二次世界大戦中に於ける海兵時代からの宮原氏の友人である、二等海佐山下菊二氏のお骨折りに由るものであった。

七月廿五日、我々は生徒達の朝の体操を見学、その後海軍記念館、護衛艦たかつき、海上自衛隊学校を見学した。海軍博物館は殊の外興味深かった。と云うのは中学校の初期時代、歴史学級で日露戦争に就いて読んだことを思い出したからです。

その日の午後、広島を訪問、夜に大阪へ帰った。

“留学生の皆さんと一緒に”

笹木 かつみ

四月に来日された大阪外大にて日本語を勉強中の皆さんの夏休み

旅行に、私仲間に加えて頂き、七月十九日夜、酒井副会長が親代りに付き添い神戸港より暗く波静かな瀬戸内海を、岸の明かりと満天の星きらめく中を針路を小倉へと出航し翌朝九時チャット会諸氏の掲げる「歓迎」のビルマ文学に心踊らせながら、タラップを降りる。バスにて北九州の市庁見学、最新設備を施した議会の説明に活発な質問と応答に、しばし議員気分を味わう。水族館ではアシカの珍芸に今更ながら童心に帰り、爽やかな気分にて門司のパゴダへ向う。久し振りの仏陀参拝で何を祈ったのか皆すく満足気な面持ち

なり、ケミンダさんの案内で関門トンネルと大橋を渡り人間の作り得た業に絶賛しながら朝日新聞社を見学、その後の会談では殆んどの人が家族を羨こしての留学に、その勇気と向学心、ビルマ繁栄の為の努力に感動され、惜しみなき誉の言葉をいただきその事は翌日の新聞にも報道されました。夕食会では瀬口さん作詞の靡曲「パカソに佇む」と花村さんの「還らぬ友よ」の歌をレコードと一緒に声高く合唱し彼等達のビルマの唄に聞きほれ、和やかな一時でした。

翌朝諸氏の見送りに英語通訳の西南大学生、林田さんと共に我々頼もしき若者十人のグループは夜崎へと向う。市内観光と小雨の夜の町を散策し、宿泊のホテルでは従業員皆さんの暖かいおもてなしに感謝し、御手配下さった塩見さんと翌朝出発までの時間をロビーにて談笑ののち、熊本へ向う。水前

寺公園、熊本城を見学。タクシー観光なので時間に急がされる事なくのんびりと一巡が出来大阪如きめまぐるしい人と車の都会とは違い「空気がきれい、人と車も少い」の感想であった。二十二日早朝、激しく降っていた雨も出発の時には雨雲もどこへやら、晴天に喜びながら阿蘇路へと向う。激しく活動する自然の威力に驚き、その興奮をヤマナミ・ハイウェイの絶景が神秘への道程へと導き、別府での地獄めぐりを経て小倉かチャット会の諸氏が同行し総勢十四名となり江田島へ向う。

第一術科学校の日課を我々も五時に起床して見学再軍備反対等といわれている中、マスコミの報道をそのまま信じて騒ぐよりその対象とされている現物を自分の眼で確かめ広島の見学とを合せて「平和について」の自分自身の意見が持てた事だと思ふ、この一週間の旅行が物見遊山の様なものではない、真の社会見学となる様スケジュールを組んで下さった御配慮に感謝いたします。私にとって何よりも大切にしたものは「友を失うは易く、得るは難し」ビルマ諺の言葉を心に刻み込み皆さん達とはより一層の親友でいたい。

次に皆さんの私なりの印象をお知らせします。

ボー・ターさん  
黙していても皆の良きリーダー。いつも本を手離さぬ勉強家。彼の行く所良く雨に遭う故に、彼に会われる節は是非傘の用意を忘

れずに。  
モン・ジーさん  
お酒を飲むと陽気になり、持前の美声で次々と歌が出る。得意な歌はラブソング  
アウン・タンさん  
「信州大学は冬には大変寒い所」その心配する気持は恐怖にも似た面持、神様彼の所に丈、少し寒さを避けて上げて下さい。  
チョウ・ティンさん  
日本人の発音ではチョウチンさんと呼ばれるらしく、提燈を見ると彼を思い出す。次々飛び出すジョークには顔を引き締める暇がない小皺が増えました。  
キン・モン・ウインさん  
九州旅行の後すぐ北海道へ、何んでも見よう、知ろうと意欲的、「なぜ」どうしてか  
的確な返事をするまで聞き返えされる。決してごまかす返答は許される。油絵が得意。  
テー・テーさん  
名ピアニスト。少こし早口で歯切りの良い言葉に清々しさを感じる。

マー・マーさん  
一児の母親とは信じられない程に可れんな感じの人。夏休み中、寮で作る料理はビルマに居た時よりも腕を上げた事だと思ふ。

ビルマ新研修生九州訪問の記  
宮原昭二郎

六月下旬、大阪外大へ大野助教を訪問、先生を囲んでビルマの新研修生諸君と歓談している時、



平和パコダに於ける一行

彼等の九州見学旅行の話が出た。

新研修生諸君は、今年四月五日、日本に着いて以来、言語・風俗・習慣等の急激な変化の為、ノイローゼ気味になった者が若干出たので、夏休を利用して、九州方面にでも出掛け気分転換を図るのが目的らしかった。

こと九州にかけては本場育ちだからと、旅行スケジュール作成を依頼され、二つ返事でお返けた。

六月二十二日小倉に帰りつくや否や、九州旅行のガイドブックを買い込み、早速計画にとりかかった。一人三万五千円の予算では、なかなか思う様にゆかず、九州の目ぼしい場所を駆歩で廻っても七日泊が多くなっても七日は中泊が多く、時間の余裕がなくて、車中泊が多くなって来る。又乗り継ぎの時間が分単位なので引率者には大変な仕事になるだろう。いろいろ考へ計算して見ると鹿児島迄行くのはむづかしくなり、結局九州半

周旅行となった。北九州チャット会が最終チェックを行い、スケジュール表を原田教授・酒井氏・笹木さん(今年一月、我々と訪福した、チャット会の紅一点。今度の旅行の為休暇をとり、研修生と行動を共にすることを、自ら買っ出ていただいた)郵送する。

キップは門司鉄道管理局勤務の友人に、長崎、熊本は海軍時代の仲間にお世話をお願いし、別府は保養センターを使うことにした。予算がないので格安をお願いする。

最終コース広島県の江田島に入った。ここは旧海軍兵学校のあったところで、現在は防衛大学校が卒業した者の幹部候補生学校がある。長髪族にジーパン姿の青年以外にも、特殊な環境の中で規則正しい生活をしている、日本青年が居るのを見てもらいたかった。

阪九フェリーで北九州入りする一行を迎へる為、チャット会を主体とす歓迎スケジュールも決定された。

かくして有志一同鶴首して待つほどに、七月二十日、〇九・一五、阪九フェリーより、ここにこそ手を振りながら、酒井副会長・笹木さんに引率された研修生八名が九州に降り立った。

トモエダー・ウンター・バーデイ(お会い出来てうれしい)と書いたプラカードを持った我々に次々に握手する。足立L・C会長北山氏より差向けていただいたマイクを手に全員乗込み、北九州市庁舎・議事堂・門司パコダ・関門

人道・国道トンネル・下関水族館関門大橋と廻る。朝日新聞社より記者一名同道・又旅行ガイドとして我々が依頼した、西南大学の林田君が熱心に英語で通訳してくれただので説明の大意はわかってもえたらしい。

午後三時から二時間朝日新聞西部本社を見学する。工場内で高速運転される輪転機や、原稿・校正・製版・と新聞が出来上って行く工程を説明付きで見せていただき大変興味深げであった。社内での残り約四〇分間は、社会部長も出席されて、ビルマ研修生とのインタビューが行はれた。午後からガイド役をしていた、パコダのウ・ケミンダ大僧正の名通訳で和気あいあいの内に質疑応答が交され、大変たのしみものであった。(翌日の朝日新聞朝刊に記事が載り、研修生諸君がその新聞を買

い占めた? と云はれる) 歓迎の夕食会は親しみが持てる様式ばらぬ「焼とり」「寄せなべ」料理で行はれた。昼食を時間の関係で親子丼にした為、口に合はぬ人も居た程で、夕食会では健啖ぶりを発揮し、見ていて気がよくなった。アルコールが入り、ビルマの民謡が出たり、軍歌が出たり、瀬口氏作詞「魔城」を作曲者の泉氏が歌って大かっさい。最後に植田氏の閉会の辞、右手を挙げての万才三唱で、なごりは尽きぬが、お開きにする。

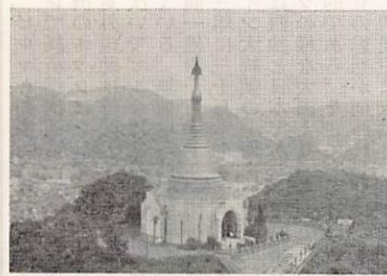
女性三名は瀬口氏の御好意で泊めていただき、男性は若戸荘に予約してあったが、旅行する時は、

全員常に同一宿舎で泊ると云うビルマの慣習とかで、急拠若戸荘へ女性三名を追加泊りすることとなり、大騒ぎしたが、風俗習慣の違いとはいへぬ、日本人の感覚からは、割切ぬものを感じた。御多忙中いろいろ宿泊の準備をしていただいた瀬口氏、特に御家族には、まことに申し訳ない次第であった。

翌七月二十一より、スケジュールに従って長崎・熊本・別府と廻り、阿蘇山の噴火口や、別府温源の地獄には目を見張ったそうである。

七月二十四日午後四時過ぎ、小倉駅から、鳴川・波多野・奥川の各氏と私の四名が乗込む。浦田・瀬口各氏の見送りを受けて、最終コースの江田島へ向う。我々四名の指定席は別の車だったが、空席が多いのを幸い、皆一ヶ所に集まり、広島に着くまで、時間を忘れて、ゆかいに話合った。広島より広島大学に在るアン・ミンさんが

加はり、更に賑やかになる。宇品からフェリーで江田島に着いたのは八時半を過ぎていた。ハイヤーで校門の前に集合。第一術科学校研究室室長をしているクラス山下君の歓迎を受けける。「江田島クラブ」は最近出来た建物で、使用するのには私も始めてであり、立派な設備がしてあった。屋上のピヤガーデンは九時迄なので急ぎ屋上でパーティーをする。大勢の隊員がたのしそうに飲んでるのに混じり、のどかわきをビールでいやし、話に花が咲く。隣席の隊員達は、女人禁制の隊内で、女性三名を交へた我々を一寸うらやましうに眺めていた。



平和パコダ

マネージャーの好意で約三〇分延長してもらったが、余り長居は迷惑になるので、山下君の案内で校内の海岸を散歩。夜見る四十種砲塔(戦艦陸奥の主砲、実物)は黒々と、まるで断崖の様にそそり立っていた。翌朝五時起床。昨夜遅かったので心配していたが、皆元気な笑顔で朝の挨拶をする。すがすがしい校内を所定の位置に集合。

六時、起床ラップと共にね起き、寝具をたたみ、服装をどこのえ、校庭に飛出す候補生群、早い者で一分三〇秒、若さではち切れそうな姿に三十年前のことを想起する。

号令演習・裸体操、集合と、規則正しく日課が進む。七時過ぎ朝食、各自セルフサービス。八時に国旗掲揚、課業行進のラップが勇ま

しくひびく、丁度アメリカ艦隊が呉に入港して、士官候補生が三十余名、江田島の学生と共に訓練を受けていた。

明治以来百年間の戦死者、名將の遺品その他を安置してある教育参考館で、岡村館長の話を聞いて、時々岡村氏が研修生に質問していたが、岡村氏がよくわかることであつた。館外に安置してある真珠湾攻撃の特殊潜水艇前でアメリカの士官候補生が記念写真を撮っていたが、今更の様に三十年の年月がしのばれ感無量であつた。

護衛艦たかつき乗艦も約一時間という短時間であつたが、現代日本科学の粋を集めた艦の装備見学は向学の為有意義であつたと思はれ、特に無人ヘリコプターには質問が集中していた。時間があれば、もっと多く見ていただけののにと残念がる山下君に深い謝辞を述べて江田島をあとにし、高速艇で宇品港に渡る。

広島では観光バスで原爆記念館その他を見学した。広島駅で約一時間待合せがあり、喫茶室に憩い談笑する。すっかり打ちとけた我々に話題は尽きず、多少疲れ気味に見受けられたがよく笑い、よく語つた。

やまない。

「ビルマ情勢懇談会」開催

去る六月十四日、最近帰国された前駐緬大使館付武官寄村武敏氏を囲んで「ビルマ情勢懇談会」を、東京郵便貯金会館で開催した。出席者は小菅副会長外廿二名。同懇談会席上に於ける寄村前武官の「お話し」の要旨は左記の通りです。(関東支部長 坂田記)

最近のビルマ事情

(一) 辺境地域の治安は依然よくない。

ビルマの国境は二、〇〇〇キロに及び、特に中国の支援を得ているビルマ共産党の制圧に手をやいている。ラングーン郊外の単独行動は外務省にお伺いをたてないと許可が出ない。偶々辺境に武官団が視察に出る時は、一個連隊が警戒に当たる程で、自由な国境視察は出来なかつた。

治安不良地区はサルヴィン河東側、ケントン周辺で、四号道路から主要都市の線を除く地区、北部カチン、東北チンヒル地区然りであり、クンロン、コーカン、ワー地区は三年間、ビルマ共産党の支配下にある。

昨年十一月から「クンロン攻防四十日戦争」と新聞に大々的に報道された討伐戦は、「外国に支援されたビルマ共産党」と特に意識して外国通信に報道された激戦の模様も、米國を除き何故か日本には

は伝わらなかつた。ビルマ軍首脳は「ビルマ国内の治安は大丈夫だが、「北京」が温和な政策をとってくれる事を望んでいる。」と云つていた。

泰緬国境には昨年魔葉王ローハンシン逮捕に一個師団を投入したが、結果は泰側で捕えられた始末であり、北部シャン高原は四十万のシャン人が居住しているが、政府の掌握が不充分である。これは地形的に複雑な為もあるけれどもラシオ以北には行けない。

ビルマ陸軍は各地駐屯部隊の他に、精鋭九一、八八、七七の三個師団があり、此の部隊は各師団共三個連隊編成で、大作戦に重点使用されている。

国防大臣が大將で准将五名、大佐三百名余りであり、国軍の訓練経験は今後向上を期待される。兵器はドイツ製が多く、日本よりの軍需品の買付けは不適当と思われている。

ヘリコプターも辺境治安に使用され手一杯であり、トラックはバス代りに利用されている現状で非常に窮屈な状態である。

(二) 経済事情は実質成長率横ばいである。石油と米の輸出に期待をかけている。七三年は米の輸出ゼロの為成長率は低下、海底油田は七一年夏より話題にのぼり日本としても二十万米ドルを投下、九月実施したが、五本目で火災事故があり、結局出油せず失敗した。本年アラバク沖に日本は国際入札に試掘権を得たがこれは有望である。

ビルマも御多聞に洩れずインフレで経済機構運営の未熟が流通経済のネックになっている。日本の対外援助は韓国、インドネシアに次いでビルマは第三位の援助をしている。無償供与は六五―七二年間一億四千万米ドル、円借款は七三年に四千七百万米ドルである。ニュー大統領の「将来の援助期待先は西独と日本である。」と語り米ソの様な大國よりの援助には消極的である。そこにビルマの自主独立の思想が伺われる。

(三) 民生は依然として苦しく「闇」が横行している。

石油に就いては自給しているが、元米自動車も少なく、工業も未発達であり、政府蔵入の重点である米の生産は変らぬとしても、政府の買上価格が安い為、供出意の如くならず大半が闇に流れる。これは流通機構が不備で運営能力に欠けるからで、協同組合はあるものの下部官吏が充分仕事をしない為である。米は当初、五百五十万トン集荷の予定であつたが、実際は九十万トンしか集まらなかつた一事をみても分る。一般民衆は良く耐えていると思われる程で、武官宅に於て配給米は三ケ年間に一回だけで、あとは闇で買求めた程であつた。

銀行には貯金もないから運用する金もない。その為に新円が二度計り発行された。就職難は大学卒で就職率五パーセント位である。社会主義政策の普通の欠陥として認められる様に、給料が同じなら怠けていた方が得であるという風

潮は下部官吏にひびく、一日に二時間位しか働かない。権限委譲の組織不備のため、却って上級職の者程、猛烈に忙しく良く働く。

石油産出地として有名なエナンジョンは、現在六〇パーセント以上操業停止、年間二十万トンの産出程度で最近ではチャウの方が主力である。ビルマ人の生活必需品である灯油は月四ガロンに制限され、ディーゼルオイルは不足でクォータ制になつた。

人口増加率は年二・五パーセントで、米の作付面積は変らぬのに、闇米価格が高騰したのは辺境少数民族も米を食うようになった為である。政府は今や米の買付けが意の如くならず、而も公定の三五倍の一キロ六八チャットする有様である。現政権下に於ける耐乏生活十三年を経た今日、三月二日の民政移管を契機にニューイン大統領はインド・パキスタン・ベンガラディッシュを訪問、三國間紛争解決の調停役をやり、それに依つてソ連の影響下に接近しこれが間接的に對中國牽制に効果がある事を期待している様である。又マレーシアと貿易正常化交渉を行う事に依つて、闇ルートにのみ依存する物資流通を、國家間の貿易収入増に転換せしめる努力を払っている。

現在闇ルートに依るビルマへの物資流入は盛況で、その拠点はメソード・ロイコー・クンロン・ラシオ間並びに海路によるもので、自由主義國家にあるものは何でも入手出来る有様で、労働者の正常

収入よりも圖収益の方が莫大である所に問題がある。労働者の生活苦に対する不満、大学生に依るラングーン周辺の騒動は本年二月以降、險悪化し、大学生五百人の求職請願、カマヨの交番焼打ち事件、六月の紡績・造船・インセン鉄道区の動乱には軍隊の鎮圧に依る廿二名の死亡事故が発生した。

政府は此等一連の事件は労働者が悪いのではなく、ビルマ共産党の地下組織の煽動に依るものであると発表しているが、それと共に過去十数年間の経済政策が必ずしも成功ではなかった事を如実に示している。

そして現在では再建の為に国民に対し、貧沢を排し、引きつづき耐乏生活をする様訴えている有様である。

戦後の展望と日本の姿勢

独立後のビルマの歴史はビルマ族と辺境少数民族間民族間の反抗、鎮圧の繰り返しの歴史で、その解決は長年に亘る懸案であったし、その上交通網の不備、ビルマ人の国民性に対する社会主義体制の不調和等が民生向上の阻害要因であったにも拘らず、仏教に因る温和な性格のお蔭で、辛うじて破綻を繕っているのである。

扱て、ビルマ人の対日本人観であるが、非常に親近感を有し、文芸春秋六月号に会田雄次氏が「ビロウしてビルマ人は昔と同じ日本人に親切なのだろうか」とビルマ、ロメロの記事を掲載しているが、ビルマ人は日本人に対しては少な

くとも欧米人に対する見方とは違つた見方をしている事を忘れてはならない。

日本が経済援助する場合、こちらの考へ方を押しつけても無駄で先方の希望するところに上手に乗つて手を貸してあげる事が大切である。

戦略的見地からすれば、ビルマは中ソ二大国に挟まれながらも、自主中立の楔を打ち込んでいるのをかたにも拘らず、極めて親日的である。而も為政者の大半は知日派であるし、斯かる心情の下では日本はビルマに対し相当援助、協力してもよいと思う。

日本政府機関内に於ても、韓国・インドネシアは経済的に日本に密着する実利があるが、ビルマに対しては支援するだけのメリットがあるや疑問視する向きもある様だ。併し今ビルマが国運を賭けている石油の輸出に就いても、長期的視野がみれば縦い日本の輸入期待量が十万吨単位の少量であっても、有効である。産業規模の小さい従ってロットの小さいビルマの物資も継続して育成する努力が大切であり、小さければそれがりに稠密な関係を保持し、日緬がガッチリ、スクラムを組むならば、タイ・インドネシアの如き排日運動の轍を踏まなくして済む事になり、十一月の田中首相の訪緬もビルマ側は誠意をもって歓迎してくれると信じる。

(文責、坂田)

支部 便り

関東支部

- 6・1 会員・和田一義氏外一名より衣料品九一五点、プラスチックランチボックス一、〇九〇点、ビルマ文教省宛贈呈。ビルマ船カレワ号積込横浜出港。
- 6・14 ベネズエラの首都、カラカスに於て開催される国際海洋会議に出席のため、出発するウ・チ・コ・コビルマ大使閣下を大使館員と共に羽田空港に見送る(栗原理事)

- 6・29 ビルマ情勢懇談会(別掲)
- 7・18 ビルマ大使館武官室交代職員を招待して歓迎パーティを(開催芝公園、東京郵便貯金会館)栗原理事外十一名出席
- 7・23 ビルマ大使館武官室職員宿舎に於ける交代職員歓迎パーティに、十八日の出席支部員招待される。
- 7・24 会員、新井良平氏余剰電気冷蔵庫一台を、駒場留學生会館へ寄贈。
- 7・25 帰国する大使館武官室職員ウ・ティン・ルイン、ウ・タウン・テウ・サムの両氏を羽田空港に見送る(栗原理事)
- 7・26 駐メキシコ大使として赴任する前駐緬大使鈴木孝氏の出発を羽田空港に見送る。(栗原理事) 出発に際し、日本ビルマ文化協会が両国

民のために益々隆盛ならん事を期待する旨のメッセージをいたした。 (栗原記)

犬が吠えていったオンサンの靴  
……ビルマ独立の志士ゆかりの地浜松をたずねて……  
東海支部

昭和十五年六月、鈴木敬司大佐は南益世と名のつて、ビルマに潜入した。日本のビルマ工作の第一歩であり、ビルマの民族独立運動がその口についたときである。オン・サン。ラ・ミヤン。シ

ユ・モン等三〇名のビルマの志士は逐次南機関の手によって日本に亡命して来たのである。そしてはげしい訓練の中で彼らの独立運動は次第にその芽を伸ばしはじめた。

ここ浜松の地は鈴木大佐の郷里であり、ある時期志士たちの隠れがとなつた処である。オン・サン、ラ・ミヤンが逗留していた小松屋旅館は、弁天島の海沿いで、現在も彼らの潜んでいた部屋が当時のまま残されている。

六月下旬のある日、東海支部小宮井・吉岡・名古屋テレビの丹羽氏がここを訪ねた。小松屋は弁天島に古くからあった旅館で、戦後火災にあつたが、日本建築の一棟が焼けのこり、新しいコンクリート造りの隣にそのまま旅館として営業されている。志士らの逗留した部屋はその二階の一間で八畳と四畳半に海を眺める廊下がついていた。その下はすぐに活にな

っている。今は古くなったこの部屋の壁も、床の間も、欄間の透彫も当時のままという。敷居際にキチンと座つて六十位の女将がわれわれの問いに答えてくれた。

「何にしろ古いことで当時の記憶と言われましてもさっぱり覚えておりませんが……」と言う女将は、その頃にさかのばれば二十代か三十前後「とても静かな人たちだつた」といふこと位。ただオンサンさんのお靴がさあお発ちというときに片方だけ犬でも吠えて行ったのか、なくなつてしまひ、どうしても分らなくてどうどう町の靴屋で買つて履いて行つてもらいましたが、丁度お足にあいましたので、これだけはよく覚えております」と言う。オンサン。ラ・ミヤンの若い志士二人は、この静かな部屋で海を眺めながら、或いは寝転んで欄間の透彫でも見ながら、祖国独立の構想を練つたことであらう。「近頃はこの部屋を見に来られる方がよく出でになります」と女将は言う。多分われわれと同じようなビルマゆかりの人達であらう。NB名古屋テレビの丹羽氏がビルマへ贈る十六ミリ映画、浜松に建立されたビルマゆかりの碑の除幕式の模様の中に挿入するための写真を熱心に撮影された。

このあと予め電話で打合せであつた故鈴木敬司少将の未亡人宅を訪れ、亡命志士の親元とも言うべき当時のお留守宅へ案内していただくことにする。未亡人には、その当時から今日迄のたくさん写真や記念の品々を拝見、これもま

たカメラに収めさせて頂く。

「あの頃はここの辺はこの家が軒あるだけでした」と未亡人が言われる。南機関長ボーモージュール留守宅は、浜松の山の手ともい

丁度この留守宅（現在某氏の居住）の前に將軍のご令嬢のお家があり、未亡人・令息ともどもいろいろ懐旧談をして頂いた。

三〇名の志士は長い苦難のすえとうとうその目的を遂げた。しかしその前途はまだまだきびしい、今が、それからが、かつての志士たちがその本領を発揮する正念場と怒るのである。

「ビルマ料理」コーナー

本号より「ビルマ料理」コーナーを設け、皆々様にビルマヘンの作り方をお知らせします。材料はすべて国内で調達出来るもの許りです。

モヒンガー（魚入りカレーヌードル）

材料（二、三人分）。さば小一尾、蓮根一節、ひね生姜小一個、にんにく小一個、たまねぎ小一個、胡椒小スプーン一、七味唐辛子小スプーン一杯、米粉大スプーン一杯、黄粉大スプーン一杯半、しよつる汗カップ一杯、天プラ油カップ一杯、化学調味料少々、卵二個、以上。

作り方。蓮根は三、四ミリ厚の輪切りにし、水に漬けておく。ひね生姜とにんにくは、各々半分を丹念にみじん切りにし（各々大スプーン一杯分）、半分は包丁の背などで軽くたたきつぶして、さばを煮るのに使う。

と、ひね生姜とにんにくの塊、それに胡椒を入れ、たっぷりの水で約廿分間煮る。さばをスープから取り出し骨をひとつ残らず取り除く。

別に加えて煮る。肉煮立ったら蓮根を加へ、蓮根が煮えたら完了。別にそうめん・きしめん等を茹でてサラダかけであえておき、此れでカレーを油で煮ぬき卵の輪切り、七味唐辛子・レモン汁・しよ

図書紹介

ビルマでは七味の代りに、ほんものの唐辛子を沢山入れます。（ドレスメーキング）

ビルマ・ヒマラヤ研究

発行所 東京都新宿区余丁町六二 矢野方 加藤陽一 付

ビルマ・ヒマラヤ研究会 定価 四〇〇円 創刊号（一九七四年夏季号）の巻頭言にて代表者（鈴木宏尚氏）が述べている様に、此の研究会は、一九七二年始めてビルマを訪れた代表者が、他の東南アジア諸国と違ったビルマの特異性に深く胸を打たれ、此れを契機にビルマのみならず、ヒマラヤ地域に関心を有つ同士の士を糾合して創られたのである。

彼等の紙面活動が、ビルマに関

心をもつ我々協会員に対して、正確な情報提供のソースになる事を期待し、又新鮮なる頭脳を通じて体得された彼等の知識や経験が、今後の文化交流に役立つならば望外の幸いである。（保科記）

正誤表（第九号会報）

Table with 3 columns: Page No., Error Description, Correction. Includes entries like '頁欄' (Page/Column), '行' (Line), '誤' (Error), and '正' (Correction).